

九 青島税関ニ日本人職員ノ任用問題 三九一

六、業務ノ実施其ノ他必要ナル規定ハ旧例ヲ參酌シ軍司令官之ヲ定メ報告スヘシ

三九一 十二月二十八日

在本邦英國大使
加藤外務大臣 会谈要領

青島税関問題ニ関スル件

十二月二十八日英國大使来省会谈ノ要領

大正三年十二月二十八日英國大使来省ノ際青島税関問題ニ関スル日支交渉ノ件ニ談及シ同問題ノ現状ヲ尋ネタルニ付大臣ハ本問題ノ大要ヲ語ラレ本件ハ事理頗ル明白ナルニ不拘支那側ニテ無理ナル論議ヲ為シ居リ結局ハ先方ニ於テ承諾スルコト、思考シ居レルガ最初「アグレン」ニ於テ日本

五九〇

ニ相談ナク勝手ニ日英兩國人ヲ以テ税関吏員ニ充テントシタルガ如キハ誠ニ言語道斷ト云フ可ク元來總稅務司ニ英人ヲ置クコトモ最初英國ノ対支貿易額他國ニ比シ最も多キ間ト云フ了解ノ下ニ於テセラレタルコトニシテ現在ニ於テハ香港ノ中繼貿易ヲ除ケハ貿易額日本ノ方遙ニ上ニ在ル様ノ次第ナレハ「アグレン」ニ於テハ此事体ヲ斟酌シテ諸事処理スルコト肝要ナリ万一支那側ニテ承諾セサルニ於テハ同税関ヲ先方ニ引渡サザル迄ノコトナリト述ヘラレタルニ大使ハ此問題ハ自分ノ直接關係セサルコトナレドモ心得ノ為伺ヒ置キタル次第ナリト答ヘタリ

事項一〇 中日実業株式会社ニ関スル件

附 朝 日 商 会

三九二 一月四日

倉知中国興業副總裁ヨリ
松井外務次官宛

中国興業株式会社ニ関スル協定要領ノ覚書送

附ノ件

大正三年一月四日

中国興業株式会社

倉 知 鉄 吉(印)

外務省

外務次官 松井慶四郎殿

拝啓

陳者小生渡支ノ際当社ノ件ニ関シ北京及上海ニ於テ中国側ト打合セテ遂ケ候次第ハ委細面陳申上置候処御參考ノ為右ニ関スル別紙覚書^(註)写供御内覧候右覚書ハ当方限ニテ調製致候モノニ御座候ヘ共調製ノ上當時小生ノ為通訳ノ任ニ当ラレタル高尾公使館書記官ノ御査閲ヲ請ヒ其承認ヲ経タル後之ヲ在北京公使館ニ提出致置候間御含相願度候 敬具

一〇 中日実業株式会社ニ関スル件 三九二 三九三

註 別紙覚書ハ日本外交文書大正二年第二冊八一〇文書ノ附屬書中ニ記載セラレタル覚書ト略ボ同文ナルニ付省略ス

三九三 一月十九日

中国興業株式会社ヨリ
小池政務局長宛

劉崇傑答札ノ為渡日ノ件

附屬書 一月十二日附在北京森恪ヨリ中国興業株式会社宛書信

同右件

大正三年一月十九日

中国興業株式会社(尾崎印)

外務省

小池政務局長殿

拝啓

劉崇傑氏渡日ノ件及社名変更ニ関スル件ニ就キ北京来信写別紙御送付申上候間御一覽被下度候 勿々

(附屬書)

大正三年一月十二日

北京

五九一

東京

森 恪

中国興業株式会社 御中

拝啓

劉崇傑渡日ノ件

過般倉知副總裁ノ御來訪相成リタルニ對シ支那側ヨリノ相
当人物ヲ答礼ノ意味ニテ日本ニ派遣シテハ如何ト山座公使
ヨリ熊總理、張謇、楊士琦ニ注意アリタル趣ニテ今回駐露
公使館參贊ニ任命セラレタル原ト東京公使館參贊タリシ劉
崇傑氏ヲ代表トシテ渡日セシムルコト、相成リ明日当地出
発滿鮮ヲ經テ東上ノ途ニ就キ可申候

今回小生ノ張謇ト会见シタル際同氏ハ中国興業公司改名ニ
関シ頑強ニ改名センコトヲ主張致シ候ニ付小生ハ現在ノ名
称ニテ公司ノ事業ニ何等影響ヲ及ボスモノニアザルコト
ヲ縷々説明致候得共依然トシテ其主張ヲ枉ゲズ是非上海ニ
於ケル關係者等ト相談サレ度シト申出デ候旁劉氏渡日ノ事
等ニ就キ上海ニテ打合せ致シ置ク必要有之候ニ付上海ヲ經
テ帰朝致スコトニ決定シ不取敢

「倉知來訪答礼ノ意味ニテ東京支那公使館詰タリシ劉崇
傑楊士琦ノ代表トシテ明日当地出發貴地ニ行ク、森恪

拝啓

陳者去月台駕惠臨セラレ偉論ヲ拝聴スルヲ得欣佩ノ至ニ存
候茲ニ歳華肇始ニ値フ敬ンテ維フニ福祉綏嘉忻祝限リ無ク
奉存候中日合辦公司ノ件ニ付キ先頃御面談致シ已ニ端緒ヲ
得候就テハ敝國ノ代表楊士琦氏貴國ニ赴クベキ筈ニ有之候
処適々病ヲ獲テ発程致シ兼候為メ此度敝國政府ヨリ駐日公
使館一等秘書官劉崇傑ニ委托シ貴國ニ赴キ各実業家ト一切
ノ事情ヲ面談致サセ度已ニ同人ニ依囑シ貴台ニ御面陳申上
タル様致シ候間何卒可然御尽力被下度尚ホ各実業家へ御紹
介セラレ同人ヨリ敝國政府へ其推誠贊助ノ意ヲ代達セシム
ル様宜敷願上候

公司ノ迅速ニ成立センコトハ貴我双方均シク希望ノ至ニ御
座候先ハ右ノミ申上度敬ンテ日祉ヲ頌シ候 敬具

一月七日

熊 希 齡

張 謇

倉 知 鉄 吉 先生

三九五

三月三十一日

在北京森中国興業取締役ヨリ
在中国山座公使宛

本日当地出發上海ニテ周金箴等ト打合せ帰朝ス」
ト御架電申上候ニ付先着御承知被成下候事ト存候当電確メ
旁如此ニ御座候 敬具

三九四 一月二十日 中国興業株式会社ヨリ
小池政務局長宛

劉崇傑渡日ニ関スル熊總理及張綏長連署ノ書

状和訳文送付ノ件

附屬書

一月七日附熊國務院總理及張工商總長ヨリ倉知
副總裁宛書状和訳文
劉崇傑楊士琦ニ代リ渡日ニ付挨拶ノ件

大正三年一月二十日

中国興業株式会社

小 池 張 造 殿

拝啓

愈御清適奉賀候陳者此度支那政府ヨリ派遣セラレタル公使
館一等秘書官劉崇傑氏ノ齎セシ熊國務院總理、張工商總長
連署ノ書状別紙日訳御送付申上候間御一覽被下度候 敬具

(附屬書)

熊總理 兩氏來信訳文
張總長

中国興業改造並中国側株主及重役等ニ関スル

件

写

大正三年三月三十一日

北京ニテ

森 恪

山 座 公 使 閣 下

拝啓予テ御配慮ヲ辱フ致シ居候中国興業会社改造ニ就キ此
程來支那側ト折衝仕候結果漸ク本日彼我ノ間ニ意思疏通仕
リ別紙中日実業有限公司章程並ニ覚書各四通ヲ作成致シ楊
士琦氏支那側ヲ代表シ小生日本側ヲ代表シテ調印仕リ彼我
各其二通ヲ保存シ一通ヲ閣下御手許ニ御保存ヲ願ヒ他ノ一
通ヲ農商部總長張謇氏ノ許ニ保留致スコトニ相成候此許別
紙各一通御加封申上候間何卒御高覽賜リ御心付ノ方面へ御
移牒被成下度奉懇願候

尚支那側株主ハ既ニ決定致シ株金払込万端楊士琦氏ニ於テ
支那側代表者渡日迄ニ払込ヲ了シ株主名簿ハ總會ニ於テ披
露致スコトニ打合申置候其株主中ノ重ナルモノハ楊士琦、
張謇、印錫璋、周金箴、朱葆三、孫多森、孫伝鼎、聶其煒、

李経義、周学熙、袁樹勳、向瑞琨、胡宗瀛、李士偉等ノ諸氏ヲ始メ其他官民中ノ有力者ナル由ニ御座候

日本ヘハ楊士琦氏ノ代理トシテ孫多森氏、南方株主代表者トシテ周金箴氏及ヒ印錫璋氏都合三名ノ代表者ヲ派遣シ何レモ四月廿日迄ニ東京到着ノコトニ致居候

如上三名ノ中周金箴氏ハ支那全国聯合商業會議所ヲ代表シテ渡日致スコトニ相成ルヤモ測ラレズ印錫璋氏近日上海帰着ノ上確定致スコトニ相成居候

支那側重役ノ候補者ハ楊士琦、孫多森、周金箴、李士偉ノ四氏ヲ取締役ニ胡宗瀛氏ヲ監査役ニ楊士琦氏ヲ總裁ニ孫多森氏ヲ専務取締役ニ推挙致スコトニ相成候尤モ周金箴氏ノ取締役ハ或ハ印錫璋氏ト相成ルヤモ測ラレズ是レ亦印氏上海帰着ノ上決定致ス筈ニ御座候

本日楊士琦氏ヨリ原来中国興業会社ハ旧国民党一派ノ首唱ニ係リシ關係アリ且ツ目下本公司改造案ノ進捗ハ聊カ一部輿論ニ相反セルヤノ嫌アリテ多少ノ論難ヲ予期セサルベカラザル成行ト相成リ居リ加フルニ日本ニハ第二革命ニ關係アル亡命者多数在留致シ居ルノミナラズ日本ニ於テハ曾テ李鴻章狙撃其他杞憂スベキ事件アリテ北方政府ニ關係深キ

タルカ小田切カ最後ニ孫ニ念ヲ押シタル所一応楊士琦ニモ話シ見ラレタシト云ヘル由ナリ然ルニ過日森恪在京中本件ニ付楊ノ意見ヲ尋ネタルニ楊ハ愈々中日実業公司成立ニ付テハ此ノ際支那新聞買収ノ必要モアル矢先洪沢男渡支サレテハ世評喧シク却テ同公司ノ事業ニモ妨アランカトノ懸念ヲ述ヘタル由ニ付仮令小田切ノ相談ニ対シテハ夫レ程露骨ニ答ヘサルヘキモ楊ノ真意ハ推測ニ難カラス

卑見ニ依レハ洪沢男ノ渡支ハ名実共ニ單純ナル漫遊トシテモ日支兩國關係ニ利益アルヘキコトハ疑ナク支那側ニ於テモ(洪沢男カ利権獲得ヲ目的トセラレザル限りハ)無論相当歡迎スヘシトハ思ハルレトモ楊士琦ノ懸念モ理由アルニ付遠カラス本邦ヘ渡航スヘキ中日実業公司支那側代表者ノ意見ヲモ徴シ且森恪ヨリ親シク事情御聞取ノ上同公司總會後ニ於テ何分ノ儀決定セラレンコト可然何レニシテモ此ノ際前広ニ發表セラル、コトハ不得策ト思料ス

三九七

四月八日 在中国山座公使ヨリ
牧野外務大臣宛(電報)

中国興業ノ剩余株券引受方ニ関シ大總統ヨリ
指令アリタル件

モノ、行動ハ往々誤解ヲ招キテ不測ノ禍ニ遭遇スルヤノ懸念ナキニアラズ殊ニ孫多森氏ハ一層亡命者等ノ注目ヲ引クノ傾アルヤニ存セラル、ニ付支那政府ヨリハ支那公使ヘ配慮方指図可致モ日本官憲ニ於カレテモ特別ノ御保護ヲ加ヘラレ候様取計アリタシトノ申出有之候就テハ這般ノ事情御酌ミ取りノ上何分ノ御心添賜リ一行ヲシテ安心シテ旅行ヲ果シ得ル様御配慮被成下度奉願上候 敬具

註 右ハ四月十日倉知副總裁ヨリ小池政務局長宛送付越サレタルモノナリ

三九六

四月五日 在中国山座公使ヨリ
牧野外務大臣宛(電報)

洪沢男ノ中国訪問ハ中国興業会社總會後ニ決定方稟申ノ件

第二八〇号

往電第二二〇号ニ関シ四月四日当館ニ於テ宴会ノ節小田切ハ(本使ノ旨ヲ受ケ)洪沢男ヨリ渡支ニ関シ目下時機宜シキヤヲ疑フモ果シテ如何アルヘキヤト相談ノ書面ニ接シタリトテ孫宝琦熊希齡ノ意見ヲ尋ネタルニ熊ハ勿論差支ナク袁世凱ニモ既ニ話シ置ケリト云ヒ孫モ亦同様ノ意見ヲ述ヘ

第二八七号

中日実業公司ノ剩余株券引受方ニ関シ財政部ヲシテ右ニ対スル資金ヲ支出セシム可キ旨大總統ヨリ指令アリタルヲ以テ此趣國務院ヨリ財政部ヘ移牒シタル由四月七日ノ諸新聞ニ記載アリタルニ付実否ヲ孫宝琦ニ確メタルニ相違ナシトノコトナリ

三九八

四月九日 在上海村上總領事代理ヨリ
牧野外務大臣宛(電報)

中国興業株主總會ニ出席予定ノ孫多森ヨリ保

護方依頼越ノ件

第二四号

公使發四月八日第三四号

左ノ通り外務大臣ヘ転電アリタシ

中国興業会社改造ニ関シ森恪ト楊士琦トノ間ニ取極メ済ミノ経緯ニ付テハ不遠帰朝スヘキ森ヨリ委細本省ヘ報告スヘキ筈ナル所四月下旬東京ニ於テ開催ノ株主總會ニ楊士琦ノ代理トシテ出席スヘキ孫多森四月七日日本使ヲ訪問シ語ル所ニ依レハ同人ハ四月十日頃出發上海ニ至リ印錫璋周金箴ノ兩株主並ニ隨員方燕 (不明) (前中国銀行山西支店長) 孫

方尚(日本高等商業学校出身現中国銀行計算局副主任)ノ兩名ヲ從ヒ四月十四日頃上海発船神戸上陸四月二十日迄ニ入京ノ筈ナレハ本邦其筋ニ於テ相当ノ保護便益ヲ与ヘラレタシトノコトナリ孫多森ハ元来袁派ノ人物ナル所革命當時孫黄ニ与ミシテ東西ニ奔走シ其後又袁ニ親近シ革命派ニ離反セル行懸上或ハ本邦亡命者等ヨリ危害ヲ加ヘラルル虞アリトテ曩キニ楊士琦ヨリモ森ヲ通シ同人保護方本使ヘ依頼シ越セリ右ノ次第御含置ノ上可然御配慮相成タシ

三九九 四月十日 小池政務局長ヨリ
岡警保局長宛

孫多森ノ保護方ニ関シ依頼ノ件

政機密送第四七号

本月下旬当地ニ於テ開催ノ中国興業会社株主總會ニ楊士琦ノ代理トシテ出席スヘキ孫多森ハ随員ト共ニ本月十四日頃上海発神戸上陸同二十日迄ニ入京ノ筈ニ候処元来同人ハ袁派ノ人物ナルモ革命當時孫黄ニ与ミシテ東西ニ奔走シ其後又袁ニ親近シ革命派ニ離反セル行懸上或ハ在本邦亡命者等ヨリ危害ヲ加ヘラル、虞アリトノ事ニテ同人等ノ願出ニ基キ在支那山座公使ヨリ電請有之候間右ノ次第御含ノ上同人

附屬書一 中日実業株式会社中国側株式一覽表

及同右日本側株式一覽表

二 定款改正事項

三 日本側相談役氏名

(四月二十九日接受)

大正三年四月廿八日

中日実業株式会社

副總裁 倉 知 鉄 吉(印)

外務大臣男爵 加藤高明閣下

謹啓陳者中国興業株式会社ノ義ニ関シテハ客年以來多大ノ御同情ト御援助ヲ賜ハリ難有奉存候殊ニ会社組織變更ノ件ニ関シテハ種々御配慮ヲ忝フシ不堪感謝候然ルニ会社改造ノ義ハ今回愈々実行ノ運ニ相成支那側旧株主ノ大多数ハ一律会社ヲ脱退シ同国南北ヲ通シ在朝在野ノ有力者ニ於テ之ニ代リ新タニ株主トナルコト、相成申候(右新株主ノ現在表ハ別紙第一号トシテ添付致置候)依テ去ル二十五日東京商業會議所ニ於テ開催セル会社第一回定時總會ニ於テ定款ニ修正ヲ加ヘ社名ヲ中日実業株式会社ト改ムルノ件外數項ノ改正ヲナシ(右改正事項ハ別紙第二号トシテ添付致置候)且重役ノ補欠並増加選任ヲモ実行致シ尚右總會後直チ

ニ対シ特ニ相当保護ヲ加フル様御配慮相成度此段及御照会候也

四〇〇 四月十一日 中国興業株式会社ヨリ
小池政務局長宛

孫多森等中国興業第一回株主總會ニ出席ノ為
来日ノ旨通知ノ件

大正三年四月十一日

中国興業株式会社(尾崎印)

小池政務局長殿

拝啓

弊社第一回株主總會出席ノ目的ヲ以テ支那側株主代表者孫多森氏外數名不日来朝ノ趣予テ御報道申上置候処本日別紙上海支店来电写之通り孫多森、周金箴、朱葆三、印錫璋ノ四氏随員四名ト共ニ来ル十八日上海出发来朝ノコトニ決定致候間不取敢御通知申上候 勿々敬具

四〇一 四月二十八日 倉知中日実業副總裁ヨリ
加藤外務大臣宛

中国興業第一回總會ニ於テ中日実業株式会社
ト改名ノ旨報告ノ件

ニ重役会ヲ開キ總裁及支那側専務取締役ノ互選ヲ了シ候右ノ結果新旧重役ノ氏名ハ左ノ通相成申候

総 裁	楊 士 琦(新)
副 総 裁	倉 知 鉄 吉
専務取締役	孫 多 森(新)
同	尾 崎 敬 義
取 締 役	周 金 箴(新)
同	李 士 偉(新)
同	男 爵 中 島 久 万 吉(新)
同(支那 滞在)	森 格
監 査 役	胡 宗 瀛(新)
同	大 橋 新 太 郎

尚右重役会ニ於テ支那側相談役トシテ周馥、張謇、李經羲、朱葆三、印錫璋ノ五名ヲ推挙シ又日本側相談役トシテ現在ノ十名(右氏名ハ別紙第三号トシテ添付致置候)ノ外ニ尚男爵近藤廉平、中野武管ノ兩名ヲ推挙スルコトニ決定致候右ニテ会社改造ニ関スル事項ハ一段落ト相成申候間御礼ヲ兼ネ不取敢前記ノ次第上申仕候 敬具

(附屬書一)

別紙第一号

中日実業株式会社支那側株式一覽表

氏名	号	籍	株数
楊士琦	安号	安徽	三〇〇〇
孫多森	安号	安徽	二〇二〇
周晉鏞	浙号	浙江	二〇〇〇
李士偉	直号	直隸	二〇〇〇
胡宋瀛	安号	安徽	二〇〇〇
李經義	安号	安徽	二〇〇〇
袁樹勛	湖号	湖北	二〇〇〇
向瑞琨	湖号	湖北	二〇〇〇
周學熙	安号	安徽	二〇〇〇
孫伝欄	安号	安徽	二〇〇〇
聶其燁	湖号	湖北	二〇〇〇
印模	江号	江西	八〇〇
義生洋行	代吳表	蘇者錦	五〇〇

総株数 貳万五千株

朱佩珍	江蘇	四〇〇
顧履	江蘇	二〇〇
張趾麟	江蘇	八〇

中日実業株式会社日本側株式一覽表

氏名	株数	氏名	株数
日本郵船会社	一〇〇〇	薩摩治兵衛	五〇〇
大阪商船会社	一〇〇〇	志立鉄次郎	五〇〇
柳生一義	一〇〇〇	渋沢栄一	五〇〇
三井合名会社	一〇〇〇	原六郎	三〇〇
三菱合資会社	一〇〇〇	日本綿花会社	三〇〇
大倉喜八郎	七〇〇	若尾民造	三〇〇
住友吉左衛門	七〇〇	高田慎蔵	三〇〇
南滿洲鐵道会社	六〇〇	浪速銀行	三〇〇
第一銀行	五〇〇	倉知鉄吉	三〇〇
第一百銀行	五〇〇	山口銀行	三〇〇
佃一予	五〇〇	益田孝	三〇〇
中川小十郎	五〇〇	古河虎之助	三〇〇
久原房之助	五〇〇	赤星鉄馬	三〇〇
安川敬一郎	五〇〇	麻生太吉	三〇〇
安田善三郎	五〇〇	三十四銀行	三〇〇
松方巖	五〇〇	北浜銀行	三〇〇
藤田平太郎	五〇〇	三村君平	三〇〇

総株数 貳万五千株

末延道成

一〇〇

大正三年四月一日現在

株数別いろは順

(附屬書二)

別紙第二号

定款改正事項

- 一、中国興業株式会社定款ヲ中日実業株式会社定款ト改ム
- 一、第一条ヲ左ノ如ク改ム

本会社ハ中日実業株式会社ト称ス

但中華民國ニ於テハ中日実業有限公司ト称シ英文ニ

テハ The China-Japan Industrial Development

Company, Limited. ト称ス

(原文)

本会社ハ中国興業株式会社ト称ス

但中華民國ニ於テハ中国興業有限公司ト称シ英文

ニテハ The China Industrial Development

Company, Limited. ト称ス

- 一、第二条ノ終ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ業務ヲ営ム場合ニ於テ政府ノ許可ヲ要スルモノアルトキハ夫々中日両国政府ニ対シ其手續ヲ経ル

コトヲ要ス

一、第四条ヲ左ノ如ク改ム

本会社ハ本店ヲ東京市ニ中華民国營業所ヲ北京及上海ニ置ク

北京營業所ハ之ヲ總行ト称シ中華民國内ニ於ケル各營業所統轄ノ任ニ当ルモノトス

業務ノ状況ニ依リ必要アル場合ニ於テハ取締役会ノ議ヲ經テ内外枢要ノ地ニ營業所ヲ設クルコトヲ得

(原文)

本会社ハ本店ヲ東京市ニ支店ヲ上海ニ置ク

但業務ノ状況ニ依リ必要アル場合ニ於テハ取締役会ノ議ヲ經テ内外枢要ノ地ニ支店又ハ出張所ヲ設クルコトヲ得

一、第五条ヲ左ノ如ク改ム

本会社ノ公告ハ本店所轄裁判所ガ商業登記ヲ公告スル新聞紙及中華民国政府ガ公告ヲナス新聞紙ヲ以テ之ヲ為ス

(原文)

本会社ノ公告ハ本店所轄裁判所ガ商業登記ヲ公告

專務取締役ハ總裁及副總裁ヲ補佐シ其業務ヲ執行ス

一、第三十条ヲ佐ノ如ク改ム

取締役ノ任期ハ三箇年トシ監査役ノ任期ハ一箇年トス

取締役及監査役ノ任期カ最終ノ配当期ニ関スル定時總會前ニ滿了シタルトキハ其總會ノ終結ニ至ル迄其任期ヲ延長ス但任期滿了後再選セラル、コトヲ得

(原文)

取締役ノ任期ハ三箇年トシ監査役ノ任期ハ二箇年トス

(第二項ハ同文ニ付省略)

一、第三十七条ヲ左ノ如ク改ム

總裁及副總裁ハ每營業年度ノ終リニ於テ其年度中ノ決算ヲ遂ゲ財産目録、貸借対照表、營業報告書、損益計算書並ニ準備金、利益配当金及役員賞与金ニ関スル議案ヲ作り監査役ノ調査ヲ受ケ定時總會ニ提出シテ承諾ヲ求ムベシ

(原文)

スル新聞紙及支店所在地ニ於テ発行スル新聞報及申報ヲ以テ之ヲ為ス

一、第十七条ヲ左ノ如ク改ム

資本ノ十分ノ一以上ニ当ル株主ヨリ會議ノ目的及其招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ總會ノ招集ヲ請求スルトキハ總裁及副總裁之ヲ招集ス

(原文)

資本ノ十分ノ一以上ニ当ル株主ヨリ會議ノ目的及其招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ總會ノ招集ヲ請求スルトキハ總裁又ハ副總裁之ヲ招集ス

一、第二十八条ヲ左ノ如ク改ム

總裁及副總裁ハ共同シテ会社ヲ代表ス但總裁又ハ副總裁ノ内何レカ一方ガ欠員ナル場合ニ於テハ他ノ一方ニ於テ会社ヲ代表ス

(原文)

總裁及副總裁ハ各自会社ヲ代表ス

一、第二十九条ヲ左ノ如ク改ム

專務取締役ハ總裁及副總裁ヲ補佐シ業務ヲ執行ス

(原文)

總裁又ハ副總裁ハ每營業年度ノ終リニ於テ其年度中ノ決算ヲ遂ゲ財産目録、貸借対照表、營業報告書、損益計算書並ニ準備金、利益配当金及役員賞与金ニ関スル議案ヲ作り監査役ノ調査ヲ受ケ定時總會ニ提出シテ承諾ヲ求ムベシ

(附屬書三)

別紙第三号

相談役 (日本側)

沢 沢 栄 一 君
早 川 千 吉 郎 君
古 市 公 威 君
井 上 準 之 助 君
志 立 鉄 次 郎 君
柳 生 一 義 君
三 村 君 平 君
山 本 条 太 郎 君
大 倉 喜 八 郎 君
小 山 健 三 君

四〇二 四月三十日 加藤外務大臣ヨリ
在上海村上総領事代理宛(電報)

渋沢男等ノ中国訪問ニ付便宜供与方ノ件

第一六号

渋沢男ハ支那各地漫遊ノ為一行十一名ト共ニ五月二日神戸
発地洋丸ニテ六日上海着七日杭州一泊八日上海帰着九日蘇
州見物十日上海発十一日南京一泊十二日溯江ノ予定就テハ
通訳旅館準備等諸事便宜ヲ与ヘラレタシ
右訓令トシテ杭州、蘇州、南京ヘ郵報アレ

四〇三 四月三十日 加藤外務大臣ヨリ
在中国山座公使外十公館長宛

渋沢男爵中国旅行ニ付便宜供与方ニ関スル件

附屬書一 渋沢男爵随員及同行者

二 同右旅行日程

附記 五月三十日在天津窪田総領事発加藤外務大臣
宛電報第四〇号

渋沢男爵旅程変更ノ件

在北京 山座公使宛

政送第九〇号

在上海 村上総領事代理宛 政送第七〇号

在杭州 深沢事務代理宛 政送第二三号

在蘇州 池永事務代理宛 政送第一八号

在南京 打田事務代理宛 政送第三六号

在漢口 高橋総領事代理宛 政送第七四号

在天津 窪田総領事宛 政送第五二号

在奉天 落合総領事宛 政送第四五号

在長春 本部領事宛 政送第三四号

在吉林 林領事宛 政送第二八号

在安東 吉田領事宛 政送第三八号

以上各通

渋沢男爵今回支那視察ノ目的ヲ以テ別紙甲号列記ノ随員及
同行者ト共ニ別紙乙号日程ニヨリ各地方旅行ノ等ニ付貴地
着ノ節ハ通訳及旅館準備等諸事便宜ヲ与ヘラレ候様致度尤
モ別紙日程ハ大体ノ予定ニ止リ途中変更ヲ加フルコト相
成ヤモ計リ難キ趣ニ有之候間右様御承知相成度此段申進候
也

在漢口総領事代理並ニ在天津総領事ヘハ追書トシテ「追
テ在〇〇出張員(漢口ノ分ヘハ九江天津ノ分ヘハ濟南)
ヘハ貴官ヨリ此旨御通知相成度右申添候」ヲ附記スルコ

渋沢男爵旅行日程

大正三年五月 二 日金 東京出発、同日地洋丸ニテ神戸

ト
甲 号
(附屬書一)

渋沢男爵随員及同行者

随員

渋沢武之助

明石照男

秘書役 増田明六

同 大沢正道

医師 堀井宗一

野口米次郎

堀江伝三郎

同行者

大日本麦酒株式会社々長 馬越恭平

同社員(馬越随員) 仲田慶三郎

東洋生命保険株式会社社長 尾高次郎

同社員(尾高随員) 辻友親

(附屬書二)

乙 号

一〇 中日実業株式会社ニ関スル件 四〇三

十五日金 朝大貞丸ニテ出発夜漢口着

十六日土 漢口滞在

出帆

六 日水 午前上海着

七 日木 午前八時滬杭鉄道ニテ発、午後
一時十分杭州ニ着一泊

八 日金 午後一時三十分杭州発、午後五
時三十分上海ニ帰着

九 日土 午前七時三十五分滬甯鉄道ニテ
上海発、同九時五十分蘇州着見

物ノ上上海ニ帰着

十日 午後十一時上海発車

十一 日月 午前八時南京着

十二 日火 早天襄陽丸ニテ溯江

十三 日水 午後九江停泊中上陸見物

十四 日木 未明石灰窑着上陸、大冶見物ノ
上石灰窑ニ帰着

十五日金 朝大貞丸ニテ出発夜漢口着

十六 日土 漢口滞在

十七日日 午前九時漢口発
十八日日 午後五時十分北京着、二十三日迄滞在
二十四日日 午前八時三十分北京発車、同十一時五十分天津着
二十五日日 午前九時三十五分天津発、午後七時四十分濟南着
二十六日日 午前七時三十分濟南發車曲阜着
二十七日水 兩日中ニ聖廟參拝泰山登臨
二十八日木
二十九日金 午後濟南ニ歸着
三十日土 午前七時濟南發車、午後四時二十分天津着
三十一日日 午前十一時五十五分天津發車、午後六時二十分山海關着
六月 一日 午前七時三十五分山海關發車、午後六時十五分奉天着
二 日火 午前九時二十五分奉天發車、午後八時二十分大連着

三 日水 大連滞在
四 日木 旅順見物、大連歸着
五 日金 午前九時四十五分大連發車、午後九時十八分奉天着
六 日土 奉天滞在
七 日日 午前八時十分奉天發車、午後五時長春着
八 日月 吉林見物ノ上長春ニ歸着
九 日火 午前七時長春發車、午後二時二十七分蘇家屯着、同五時三十分地發車、同六時四十五分撫順着
十日水 撫順炭礦見物ノ後奉天ニ歸着
十一日木 午前九時四十分奉天發同十一時三十六分本溪湖ニ着
十二日金 午前十一時四十分本溪湖發車、午後五時十五分安東県着
十三日土 午前八時二十分安東發車、午後七時三十分京城着十五日迄同地

(附記)

五月三十日在天津窪田總領事發加藤外務大臣宛電報
宛電報

洪沢男爵旅程變更ノ件

第四〇号

洪沢男爵恙ノ為旅程變更本日海路大連へ向ケ当地ヲ出發セリ同男ハ滿洲旅行ヲ中止シ直ニ歸朝ノ予定ナリ

四〇四

五月十五日 在上海村上總領事代理ヨリ加藤外務大臣宛

洪沢男等ノ上海訪問ニ関シ情況報告ノ件

附屬書 洪沢男等ノ上海訪問ニ関スル「チャイナプレス」記事切抜

公信第一九三号

大正三年五月十五日

在上海

(五月二十八日接受)

總領事代理 村上 義 温(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

洪沢男爵一行ノ来滬ニ関シ本月六日付貴電第十七号ヲ以テ情況報告方御下命相成敬承一行十二名ハ予定ノ如ク六日朝地洋丸ニテ当地着兼テ万端ノ便宜取計方御電訓ノ次第ニ有之宿舍、接客、巡覽乃至歡迎ニ関シ支那側其他トモ打合セノ上手筈ヲ定メ置キ則チ六日夜支那官商知名ノ紹介ヲ兼ね在留日本官民有志ニ於テ同男一行ノ歡迎会ヲ催シ貴代理觀察使、鄭鎮守使、李海軍總司令、周總商會總理、貝協理、孫多森、印錫章其他總商會新旧議董及唐紹儀、伍廷芳等四十余名ヲ併セ招キ席上同男ハ大要今次ノ行何等利權ノ獲得ヲ目的トスルニ非ルハ固ヨリ單ニ孔孟ノ教ヲ奉スル身トシテ其淵源地ニ一遊ノ素志ヲ遂行セシニ過キスト雖モ日支兩國ノ實業聯繫ハ事緊要ニ属シ中日実業会社ノ成立亦之ニ胚胎スルニ外ナラサルニヨリ宜敷之レカ事業ノ發達ニ好意ト援助ヲ与ヘラルヘキヲ切望スル旨演述シ支那人側ヨリハ貝總商會協理虞觀察使代理沈紅十字會副會長交々立チテ同男ト會談ノ機ヲ得タルヲ喜ヒ其孔孟ノ教ニ篤キヲ讚ヘ今后益々中日実業ノ提携特ニ中国興業ノ發展ニ努力セラレ度キ旨

ヲ挨拶シ越エテ九日蘇州、杭州巡覽帰滬ノ后支那總商会ノ中国興業及漢冶萍公司ノ合同歡迎会ニ臨ミ先方ニ於テハ当地日支官民ノ招待余與其他ノ撰撰ニ優遇ノ意ヲ表ハシ席上盛宣懷ノ代理沈仲礼、周金箴、孫多森各々歡迎ノ意ヲ展ヘ渡日觀光ノ所感ヲ語り今后ノ提携發展一ニ同男ニ負フ所不少ルベキヲ演述シ男爵亦前記挨拶ト同工委曲ニ説キ翌十日小官々舍ニテ同男、馬越其他及唐紹儀、伍廷芳、鄭鎮守使、虞代理觀察使薩警察督弁、孫多森、周金箴等ヲ招キテ懇話ノ機會ヲ作り談笑ノ傍ヲ迭々ニ日支兩國ノ親交特ニ經濟的連鎖ノ切実ト中日実業会社發達ノ緊要ヲ会谈同夜交渉公署ニ於ケル鄭鎮守使、薩警察督弁、虞觀察使代理ノ招宴ニ出席シ鄭鎮守使ハ同男カ日本維新以來実業界ノ元老トシテノ効績ヲ頌シ殊ニ孔孟ノ学ヲ奉シ立国ノ根本タル実業界ニ活動セシ卓見ヲ敬慕スト述ヘ更ニ忠信篤敬ヲ以テ両国人ノ携繋ヲ希望シ東亜大局維持ノ為メニ支那実業界ニモ同男ノ援助ヲ仰ク旨ヲ衍述シ宴終リテ后日支官民ノ見送ヲ受ケ(殊ニ支那官憲ヨリハ巡警及乘隊ヲ停車場ニ整列セシメタリ)南京ニ向ケ出發致候間右ニ御了承相成候様致度尚ホ同男ハ滯在中盛宣懷往訪ノ序ニ井上侯爵ノ依頼ニ基ク故ヲ以

ヒニ至ラサル処貴見如何トテ暗ニ相当ノ援助ヲ求メ之レニ對シ同男ヨリ右ハ咄嗟ノ質問ニシテ容易ニ定見ヲ發表シ得能ハサルモ国各々地位ト事情ヲ異ニスルモノナルニ付キ列国ノ同意アリシ故ヲ以テ未ダ日本ノ態度ヲ云為ス可カラサルノミナラス事実紛績其他ノ方面ニ痛切ナル不利益ヲ感スルモノナリ等漠然タル回答ヲ与ヘ置キタル由ニ有之追テ当地米國新聞「チャイナ、プレス」記者同男ヲ宿舍ニ往訪其談話ノ一筋トシテ別紙切抜ノ通り掲載致居リ右為念報告申進候 敬具

(附屬書)

洪沢男等ノ上海訪問ニ関スル「チャイナ、プレス」記事切抜

Economic Cooperation

“I am glad that the Anglo-Japanese Alliance is to continue,” said the Baron, but I am sorry to hear sometimes the statement that Japanese interests conflict with British. I am in doubt as to why people say that. Some say that the Anglo-Japanese Alliance is only a military one, but that is a narrow conception. There should be an economic cooperation as well. I

テ漢冶萍問題ニ関スル意向ニ付キ種々懇談アリ同男ヨリ日支兩國ノ親和殊ニ其根本タルベキ実業聯絡ニ言及スルヤ盛ハ日支兩國ノ親和ハ両国人ノ常ニ唱フル処ニシテ然カモ其多クハ空言ニ終ルノ感アルヲ遺憾トス今回漢冶萍公司借款ノ如キモ兩國ノ利益ニ鑑ミ反對アリシモ決行シタル次第ニシテ自分ハ常ニ兩國聯絡ノ実行ニ努力セル一人ナリト述ベ其后李維格盛ノ代理トシテ同男ヲ來訪シ漢冶萍ノ収支並ニ工程ノ現状及計画ヲ内話スルト共ニ結局本公司ハ日本ノ援助ヲ受ケ然カモ日本側トノ利害切実ナル一大事業ニシテ其發展成功スルト否トハ將來日支兩國ニ關係アル事業ニ重大ナル影響ヲ及ホス可ク若シ本公司カ日本ノ援助ニヨリ然モ日本側ト利害ヲ共ニシテ發達成功シ他ノ支那事業ノ模範ヲ示サンカ今后支那官民ハ自ラ進ンテ日本ノ援助ヲ求ムルニ至ル可キコト必然ナルニ鑑ミ日本技師及ヒ會計顧問其他ニ於テ本公司事業カ独リ支那ノ事業タルノミナラス日本直接ノ事業タル觀念ノ下ニ銳意改善ノ道ヲ講セラレ度キ旨ノ希望ヲ洩シ居リ將又會々來滬中ノ Aglen ト會見ノ際同人ハ冒頭日本近來ノ揚子江ニ於ケル發展ヲ mention シ次イテ支那関稅問題未タ日本ノ同意ヲ得サルノ故ヲ以テ改正ノ運

recognize the importance of the British influence in the Yangtze valley. It is also true that each of the allies should concede something to the other for if not conflict of interests takes place. If we can cooperate in the Yangtze with the British we will not hesitate to do so. But we do not wish to bring about a conflict of interests.

“For the development of a country,” he continued, there are necessary three economic factors: resources, capital and the knowledge and experience of men. China has many resources to be developed. The British have the capital and the Japanese can cooperate with the British in China by furnishing men with knowledge of China.”

Finance in the opinion of the Baron, is the first thing toward which the Chinese must turn their attention to put their country on a firm basis and in the way of progress. The industries are to be promoted, and mines to be opened, but first in importance is the improvement of China's finances.

When asked regarding the outlook in his own country, Baron Shibusawa said that he was not a politician and that he could not say anything regarding

the present ministry or the success of the program of Count Okuma who is his personal friend. There were so many different parties to be harmonized that he could not predict the success or failure of the present ministry. He had advised Count Okuma when the portfolio was offered him not to accept it, but the pressure was such from all classes of the people that Count Okuma felt it his duty to do so.

Five Leaders of Japan

The relationship of Baron Shibusawa, financial leader, and Count Okuma, political leader, in Japan has been an interesting one and dates back to the early years when these two men, together with Prince Ito, Marquis Inouye and Marquis Matsukata first began their work of steering Japan out of her isolation into the open sea of the world's affairs and the world's commerce. The five have been called the fathers of their country's economic and financial progress in modern times and the accomplishment of the wonderful transformation of Japan in the Meiji Era was largely due to them.

Baron Shibusawa after his return from Europe in 1868 was appointed a high official in the Treasury on

the establishment of the Imperial Government and retired to private life in 1873. It has been as a private citizen that he has wielded influence since.

It is difficult to appreciate the tremendous tasks which confronted this small coterie of men pledged to their country's best development. When the government fell into the hands of the men who had made the Restoration, they lacked the first essential of rule—money and money power—and not only that but they were also without means of obtaining any as they could not collect taxes in the fiefs which were under control of the feudal barons. But the Samurai, without any business training essayed first to take charge of the national revenue, to encourage industry and promote business by lending money at comparatively low rates. As a Banker

The machinery for all this was largely in the hands of Baron Shibusawa and he it was who took the lead in familiarizing the Japanese with the devices for combining capital for productive purposes. He was the president of the first national bank of Japan and for over forty-two years has been president of the First Bank of Japan, the Dai Ichi Ginko. Company after

company asked for his services as director and for years he has been director of no less than forty and has exerted a great influence upon their destinies. Five years ago he discontinued all his direct business connections except with Dai Ichi Ginko.

In addition to the multitude of his business responsibilities, Baron Shibusawa has interested himself in educational matters, literature, and charities. In 1909 he visited the United States as the head of the Japanese business men who were invited by the U. S. Chambers of Commerce.

四〇五 五月十八日 在漢口高橋總領事代理ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

渋沢男等ノ漢口訪問ニ関シ報告ノ件

第一〇二号

渋沢男ハ十五日朝当地著中央政府ハ特ニ都督商務總會等ニ訓令シ頗ル優待ニ努メ都督民政長及商務總會頭ノ男ニ対スル歡迎ハ甚タ慰勸ヲ極メタリ又都督及民政長共ニ男ノ往訪ニ対シ答礼ノ為男ヲ當館ニ來訪セリステ男ハ商務總會員及邦人等多數ノ見送ヲ受ケ十八日朝北京ニ向ケ出発シタルカ

京漢鐵道當局ハ一行ノ為特ニ優待車ヲ聯結シタリト尚又ハ本報告ニ依レハ男ノ九江寄航ニ際シ江西官憲モ亦優待ノ意ヲ表シタリト委細郵報公使済シ

四〇六 五月十八日 在杭州深沢事務代理ヨリ
加藤外務大臣宛

渋沢男等ノ杭州訪問ニ関シ報告ノ件

公第二一九号 (五月二十七日接受)

大正三年五月十八日

在杭州

領事館事務代理 深 沢 暹(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

渋沢男爵一行來杭ニ関スル件

渋沢男爵一行ノ來杭ニ関シテハ其接待觀光等ニツキ預メ支那側トモ打合セノ上次序ヲ定メ置タル処上海ヨリノ随行者ヲ加ヘタル男爵一行十六名ハ預定ノ通り本月七日零時四十分着杭本邦官民ノ外支那官民ノ盛シナル出迎アリ支那側ニ於テ特ニ準備シタル旅館ニ至リ休憩後領事館ニ於テ男爵一行及ヒ在留本邦人合セテ三十四名ヲ午餐ニ招待シ了リテ舟ヲ艤シテ西湖周遊ヲ試ミ午後六時半ニ至リ朱都督屈民政長

ヲ訪問シ八時都督府ニ於ケル都督民政長交渉員主催ノ宴会ニ臨ミ各司長其他官商両界ノ重ナル代表者ノ出席アリシカ朱都督ハ主人側ヲ代表シ左ノ歡迎詞ヲ述ヘタリ

洪沢男爵ハ日本政治界ノ巨擘実業界ノ明星ナリ吾人カ男爵ノ風儀ヲ想望セルコト日タル已ニ久シ今日遊歴來杭セラレ鄙人カ民政長外交員及ヒ列席諸君ト一堂ニ聚マリ親シク卓議ヲ聴クヲ得ルハ曷ソ榮幸ニ勝ヘンヤ日本ハ浙江ト相隔ツ一水数日ニシテ達スヘシ日本ノ士紳來杭遊歴セラル、者時ニ人ニ乏シカラス然レトモ洪沢男爵ノ年高ク望重ク令聞卓彰ナルカ如キハ固トニ多ク見ルヘカラズ是レ吾人カ極メテ歡迎ノ意ヲ表スル所以ナリ今ヤ商戰ノ世ニ当リ国家ノ富強ヲ求メント欲セハ一ニ実業ノ發達ニ頼ル然ルニ実業ノ發達ヲ求ムルニハ則チ官府ノ提唱ト人民実業知識ノ増進トニ在リ我國実業ハ尚幼穉ノ時代ニ在リ前キニ鄙人ハ民政長ト共ニ本省ノ士商ヲ勸導シテ実業觀光團ヲ組織セシメ日本ニ赴ヒテ遊歴參觀以テ借鏡ニ資セシメタリ東渡ノ後洪沢男爵ハ照料周至指導懇懇是ニ於テ乎益々中日兩國国民交誼ノ親睦ヲ徴シ最モ洪沢男爵カ隣友ヲ優待セラレタル

徊去ルニ忍ハサラシメタリ只今閣下ノ言ハ讚獎敢テ當ラズ惟タ予ハ從來実業各方面ニ於テ多少ノ經驗ヲ有シ曩ニ成立セル中日実業会社ニ就テモ日本側トシテ親シク与カル所アリ同会社カ今後兩國実業關係上其發達振興ヲ助ケ貴我交誼ノ親厚ニ貢獻スル所多カルヘキハ言ヲ待タズ而シテ北京方面ニ於テ之カ基礎確立上ニ多大ノ尽力ヲ致サレタルハ深く感謝スル所ナリ想フニ今ヤ何レノ国民タルヲ問ハス軍事教育等亦固ヨリ国家ノ要政タルヘキモ実業ノ發達ハ之ヲ第一ニ推ササルヘカラズ實業ノ振興ハ富強ノ根柢タリ之ナクンバ現世ニ処シテ世界各国ト馳騁シ難カルベシ況ンヤ比肩ヲヤ殊ニ貴我兩國ノ如キハ誠ニ特種ノ間柄ニ在リ彼此聯絡ヲ密ニシテ堅ク相提携シ以テ双互ノ進達ヲ計ラサルベカラズ是レ予ノ切ニ希望スル所ナリ曩ニ貴省觀光團ノ來遊ニ際シ一夕ノ会合ヲ得タルノミニシテ十分地主ノ誼ヲ尽スヲ得サリシハ遺憾トス然ルニ茲ニ貴地ニ來遊シ貴国官商ヨリ鄭重ナル歡迎ヲ受ケ本タ亦貴都督及民政長閣下ニ於テ予一行ノ為メ斯盛宴ヲ設ケラレタルハ好情深謝ニ堪ヘス願ハクハ今後兩國ノ人士互ニ來往ヲ重ネ益

ノ感懷ヲ見ルニ足ル特リ觀光團員ニ於テ其高誼ニ感セルノミナラズ即チ浙中官商各界モ亦同シク休風ヲ佩セリ是レ吾人カ第一ニ申謝スヘキ所ノモノナリ洪沢男爵ハ実業ヲ經營セラルコト多年成績甚タ著ルシク經驗極メテ優レリ今回來杭遊歴セラル吾浙ノ実業情形ニ就キ考查必スヤ晰カナラン其短ナル所ヲ指シテ示スニ改良整頓ノ方ヲ以テセラル、コト是レ洪沢男爵ニ望ム所ノモノナリ謹ンテ杯酒ヲ酌ンテ洪沢男爵ノ寿ノ為メニス云々

右ニ對スル男爵ノ答辭大要左ノ如シ

今回予ノ貴国漫遊ハ別ニ公ケノ使命ヲ帶ヒタルニアラズ又事業上何等特別預定ノ企画アルカ為メニアラズ惟タ予ハ幼時ヨリ孔孟ノ教ヲ受ケ深ク之ヲ崇信シ兼テ貴國ノ文物趣好ニ於テ多大ノ興味ヲ有セリ此行旅次曲阜ノ孔廟ニ謁シ以テ生平ノ素願ヲ了シ兼テ貴国各処ノ勝景名蹟ヲモ探リ亦旧知ト相会シテ交情ヲ温タムルヲ得ルハ欣懷ニ堪ヘサル所ナリ曾テ書籍ニノミ知レル西湖ハ親シク來ツテ之ニ接スレハ風致自カラ一段ノ佳趣アリ真ニ百聞一見ニ如カサルヲ覺ヘ山光湖色人ヲシテ低

々交誼ヲ親シクシ予モ亦日本ニ於テ東道タルノ機会多カラシコトヲ爰ニ一行ニ代リテ謝辭ヲ述ヘ閣下並ニ諸君ノ健康ヲ祝ス云々

翌八日午前七時朱都督屈民政長及温交渉員ハ洪沢男爵及ヒ馬越社長ヲ領事館ニ答礼シ男爵トノ間ニ養蚕ニ関スル談話アリ都督民政長辭シ去リタル後一行ハ小官及交渉員ノ案内ニテ岳王廟、玉泉寺、靈隱寺等ニ遊ヒ靈隱寺ニ於テ交渉員ノ設ケタル茶菓ヲ喫シ同寺ヨリ廻リテ吳山ニ上リ正午城内保佑坊杭州商務總會ニ於ケル宴会ニ臨ミシカ各司及ヒ重ナル會員等ノ出席アリ顧總理（松慶）ヨリ鄭重ナル歡迎ノ詞アリ併セテ浙江觀光團東渡ノ際男爵初メ日本実業家ヨリ与ヘラレタル款待指導ヲ謝シ將來益々相互ノ親交ヲ増進センコトヲ期スト述ヘ男爵ハ之ニ對シ真摯ニシテ飾ラズ親情ニ富ミタル挨拶ヲ述ヘラレ尚將來兩國ノ交誼益々厚カラサルヲ得サル所以ニ言及セラレ当日主人側ノ好意ヲ謝シ他日日本ニ於テ之ニ酬ユルノ機アランコトヲ樂ムト言ヒテ結ハレタリ了リテ一行ハ清泰停車場側ヲナル朱舜水祠構内塩運司署ニ至リ茶菓ノ饗応ヲ受ケ塩運使其他ト閑談アリシカ時間切迫ト降雨ノ為メ同祠目下工事中ノ部分觀覽ノ暇ナカリシ

ハ遺憾ナリキ同処ヲ辞シタル男爵一行ハ前記停車場ニ於テ支那官商代表者ノ見送リヲ受ケ午後三時十五分支那側ニ於テ特ニ仕立タル汽車ニ乗シテ拱宸橋ニ至リ「ハウス、ボート」ニ搭シ四時ニ蘇州ニ向ヒ当地在留本邦人ハ我居留地河岸ニ於テ爆竹ヲ放チ其行ヲ壮シニシタリ要スルニ洪沢男爵ノ当地来遊ハ時間ニ限りアリシ為メ支那側当局其他ト深ク談セラル、ノ機ナカリシモ応酬宴席ノ間支那官民ニ好キ印象ヲ与ヘ得タルハ疑ナキ所ナリ

右及報告候 敬具

四〇七 五月二十日 中日実業株式会社ヨリ
外務省宛

中日実業株式会社定款送附ノ件

附屬書 中日実業株式会社定款

大正三年五月二十日 (五月二十日接受)

東京市麴町区内幸町一丁目三番地

中日実業株式会社

外務省

御中

拝啓

益御清適奉賀候陳者弊社改正定款四十部別封差出候間御查收相願度候尚該英文ノ者目下印刷中ニ付出来次第提出可仕候右申上度如斯ニ御座候 敬具

(附屬書)

中日実業株式会社定款

第一章 総則

第一条 本会社ハ中日実業株式会社ト称ス

但中華民國ニ於テハ中日実業有限公司ト称シ英文ニテハ

The China-Japan Industrial Development Co., Ltd. ト

称ス

第二条 本会社ハ左ノ業務ヲ営ムヲ以テ目的トス

一、各種企業ノ調査、設計、引受及仲介

一、各種ノ企業ニ対シ直接又ハ間接ニ資金ノ供給及融通ヲ為スコト

一、各種債券ノ応募又ハ引受

一、其他一般金融並ニ信託ノ業務

前項ノ業務ヲ営ム場合ニ於テ政府ノ許可ヲ要スルモノアルトキハ夫々中日兩國政府ニ対シ其手續ヲ経ルコトヲ要ス

ス

第八条 株主ハ住所及印鑑ヲ本会社ニ届ケ置クヘシ氏名、住所又ハ印鑑変更ノ場合亦同シ

第九条 本会社ノ株式ハ取締役会ノ承認ヲ得ルニアラサレハ譲渡ヲ為スヲ得サルモノトス

第十条 相続、遺贈、婚姻其他法律ノ作用ニ因リ会社ノ株式ヲ取得シタルモノハ其株券ニ事実ヲ証明シタル書面ヲ添ヘ名義書換ヲ請求スヘシ

第十一条 株券ノ毀損又ハ分合ニ依リ書換ヲ請求スルトキハ会社ハ相当ノ手續ヲ経テ前株券ト引換ニ書換株券ヲ交付スヘシ

第十二条 株券ノ紛失又ハ滅失ニ因リ新ニ株券ノ交付ヲ請求スルトキハ其事実ノ証明ヲ得タル後請求者ノ費用ヲ以テ其旨ヲ公告シ六十日ヲ経テ発見セサルトキハ新ニ株券ヲ交付スヘシ此場合ニ於テハ前株券ハ当然無効トス

第十三条 滅失又ハ紛失ノ届出アリタル株券ニ関シ異議ノ申立ヲ為スモノアルトキハ本会社ハ裁判所ノ判決ニ依リニアラサレハ新株券ヲ交付セサルヘシ

第三条 本会社ノ資本総額ハ金五百万円トス但株主總會ノ決議ヲ経テ之ヲ増額スルコトヲ得

前項ノ資本金ハ中日兩國人ニ於テ各其半額ヲ引受クルモノトス

第四条 本会社ハ本店ヲ東京市ニ中華民國營業所ヲ北京及上海ニ置ク

北京營業所ハ之ヲ總行ト称シ中華民國内ニ於ケル各營業所統轄ノ任ニ当ルモノトス

業務ノ状況ニ依リ必要アル場合ニ於テハ取締役会ノ議ヲ経テ内外概要ノ地ニ營業所ヲ設クルコトヲ得

第五条 本会社ノ公告ハ本店所轄裁判所ガ商業登記ヲ公告スル新聞紙及中華民國政府カ公告ヲナス新聞紙ヲ以テ之ヲ為ス

第二章 株式

第六条 本会社ノ株式ハ記名式トシテ尅株ノ金額ヲ尅百円トシ其株数ヲ五万株ニ分ツ

株券ハ尅株券、拾株券及百株券ノ三種トス

第七条 株金払込ハ尅株ニ付第壹回ニ金貳拾五円トシ第貳回以後ハ事業ノ必要ニ応シ株主總會ノ決議ヲ経テ之ヲ為

第十四条 会社ハ手数料トシテ株券売通ニ付第九条及第十条ノ場合ニハ金式拾銭、第十一条及第十二条ノ場合ニハ金五拾銭ヲ徴集ス

第三章 株主総会

第十五条 定期総会ハ毎年四月之ヲ開キ臨時総会ハ必要アル毎ニ之ヲ招集ス

第十六条 総会ノ決議ハ出席株主ノ議決権ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス

第十七条 資本ノ十分ノ一以上ニ当ル株主ヨリ會議ノ目的及其招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ総会ノ招集ヲ請求スルトキハ總裁及副總裁之ヲ招集ス

第十八条 総会ヲ招集スルニハ総会ノ日時、場所、目的タル事項ヲ記載シタル通知書ヲ開会日ヨリ少クトモ四十日前ニ各株主ニ送スヘシ但定款ノ変更ヲ目的トスル場合ニハ其議案ヲ添付スヘシ

第十九条 総会ニ於ケル株主ノ議決権ハ壹株毎ニ壹個トス
第二十条 株主ハ代理人ニ委任状ヲ交付シテ議決権ヲ行フコトヲ得但其代理人ハ本会社ノ株主ニ限ル

第二十一条 定款変更、任意解散、合併及社債募集ハ総株

互選ス

第二十七条 取締役カ監査役ニ供託スヘキ株券ノ員數ハ壹百株トス

第二十八条 總裁及副總裁ハ共同シテ会社ヲ代表ス

但總裁又ハ副總裁ノ内何レカ一方カ欠員ナル場合ニ於テハ他ノ一方ニ於テ会社ヲ代表ス

第二十九条 専務取締役ハ總裁及副總裁ヲ補佐シ業務ヲ執行ス

第三十条 取締役ノ任期ハ參箇年トシ監査役ノ任期ハ壹箇年トス

取締役及監査役ノ任期カ最終ノ配当期ニ関スル定時総会前ニ満了シタルトキハ其総会ノ終結ニ至ル迄其任期ヲ延長ス但任期満了後再選セラル、コトヲ得

第三十一条 取締役ハ取締役会ヲ設ケ会社ノ内規其他重要ナル業務ヲ議定ス

取締役会ノ議事ハ總裁、總裁事故アルトキハ副總裁ヲ以テ會長トシ過半数ニ依テ決ス可否同数ナルトキハ會長之ヲ決ス

第三十二条 取締役会ハ会社ノ重要事項ヲ諮詢スル為メ相

主ノ半数以上ニシテ資本ノ半額以上ニ当ル株主出席シ其議決権ノ過半数ヲ以テスルニアラサレハ決議ヲ為スコトヲ得ス

第二十二條 前条ノ場合ニ於テ出席株主カ定數ニ滿タサルトキハ出席シタル株主ノ議決権ノ過半数ヲ以テ仮決議ヲ為シ其旨ヲ各株主ニ通知シ更ニ一箇月以内ニ第二ノ總會ヲ招集シ出席株主ノ議決権ノ過半数ヲ以テ仮決議ヲ決スルモノトス

第二十三條 總會ニ於テ決議シタル事項ハ其要領ヲ決議録ニ記載シ議長署名ノ上会社ニ保存スヘシ

第二十四條 總會ノ議長ハ總裁又ハ副總裁之ニ任シ總裁又ハ副總裁事故アルトキハ他ノ取締役互選ヲ以テ之ニ任ス

第四章 役員

第二十五條 本会社ノ役員ハ取締役十名以内及監査役四名以内トス

第二十六條 役員ノ選任ハ總會ニ於テ壹百株以上ヲ有スル中日両國人株主中ヨリ各半数ノ取締役及五十株以上ヲ有スル中日両國人株主中ヨリ各半数ノ監査役ヲ選舉ス

取締役中ヨリ總裁一名、副總裁一名及専務取締役二名ヲ

談役及顧問若干名ヲ推薦スルコトヲ得

第三十三條 役員中死亡又ハ辭任ニ因リ不時ニ欠員ヲ生ジタルトキハ株主總會ニ於テ欠員役員ノ国籍ニ準シ補欠選舉ヲ為スヘシ

但補欠當選者ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第三十四條 總裁、副總裁、専務取締役、普通取締役及監査役ノ給料又ハ報酬ハ總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第五章 計算

第三十五條 本会社ハ毎年三月末日ニ於テ總勘定ノ決算ヲ為ス

第三十六條 本会社ハ毎決算期ノ營業純益金ノ中ヨリ左ノ金額ヲ控除シ其殘額ヲ株主配當金ニ充テ又ハ次期ニ繰越スコトヲ得

- 一、積立金 百分ノ五以上
- 二、別途準備金 百分ノ五以上
- 三、役員賞与金 百分ノ二十以内

第三十七條 總裁及副總裁ハ每營業年度ノ終リニ於テ其年度中ノ決算ヲ遂ケ財産目錄、貸借対照表、營業報告書、損益計算書竝ニ準備金、利益配當金及役員賞与金ニ関ス

ル議案ヲ作り監査役ノ調査ヲ受ケ定時總會ニ提出シテ承諾ヲ求ムヘシ

第三十八条 配当金ハ毎年三月三十一日現在ノ株主ニ払渡スヘシ

第六章 附則

第三十九条 本会社ノ負担ニ歸スヘキ設立費用ハ金壹万円以内トス

第四十条 発起人ノ氏名住所ハ左ノ如シ

(氏名及住所略ス)

中日実業株式会社職員 (大正三年四月三十日現在)

取締役総裁	楊 士 琦
取締役副総裁	倉 知 鉄 吉
専務取締役	尾 崎 敬 義
専務取締役	孫 多 森
取締役	男爵 中島久万吉
取締役	森 恪
取締役	周 晋 鏞
取締役	李 士 偉
監査役	大橋新太郎

監査役	胡 宗 瀛
相談役男爵	洪 沢 栄 一
相談役男爵	近 藤 廉 平
相談役	中 野 武 營
相談役	井上準之助
相談役	志立鉄次郎
相談役	柳 生 一 義
相談役	早川千吉郎
相談役	三 村 君 平
相談役	小 山 健 三
相談役	古 市 公 威
相談役	大倉喜八郎
相談役	山 本 条 太 郎
相談役	周 馥
相談役	張 謐
相談役	李 經 義
相談役	朱 佩 珍
相談役	印 有 模

四〇八 五月二十九日

在中国松平臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛

洪沢男ノ中国訪問ニ関シ報告ノ件

附 記

中日実業会社ノ事業ニ関シ洪沢男北京滞在中
側ニ交付シタル覚書ヲ

公第一八七号

(六月八日接受)

大正三年五月二十九日

在支那

臨時代理公使 松 平 恒 雄(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

洪沢男爵来遊ニ関シ報告ノ件

洪沢男爵ハ上海到着以来各地支那官憲紳商ノ優待ヲ受ケ南京漢口ヲ經テ本月十九日交通部特派ノ貴賓車ニテ当地安着、予テ打合セノ日程ニヨリ山座公使同伴大總統ニ謁見並ニ國務卿各部総長等ヲ訪問シ又連日午餐晚餐ニ丁重ナル饗応ヲ以テ同男ニ対シ歓迎ノ意ヲ表シ候

本月二十一日予定ノ通り大總統ニ謁見ノ際大總統ヨリ同男今回ノ来遊ヲ喜フト共ニ兩國密接ノ關係ヲ実現スヘキ中日興業公司ニ関シテハ委細楊士琦ニ申シ含メ置キタレバ可然

協議ノ上同男ノ德望ト実歴ニ依リ十分該公司事業ノ發展ヲ図ルコトニ尽力セラレタシ云々トノ挨拶アリ、又二十二日熊希齡訪問ノ際ニ熊ハ同男ノ来遊ノ事ニ関シテハ自分總經理在任中伊集院山座歴任公使トモ協議ノ結果大總統ノ贊同ヲ得テ提起シタル所ニシテ今日自分ノ地位コソ前日ニ異ナレ最初ノ主旨ニ関シテハ何等變更セルコトナシ故ニ中日興業公司ノ事業ニ対シ出来得ル限り帮助スヘキ考ヘナルニヨリ同男ニ於テモ同公司ノ当局者ヲ督励シテ事業ノ進捗ニ努メラレンコトヲ望ム、又近來支那ガ欧米等ノ國ト連合シテ日本ヲ排斥ストノ世説アル如クナルガ抑々支那ガ連合ス可キ國ト言ヘバ近ク國境ヲ接スル露國或ハ間接ニ境界ヲ接スル英國若シクハ海陸最モ接近スル日本國ノ如キモノニシテ甫メテ連合ヲ説クコトヲ得ヘシ然ルニ何等閑連ナキ独仏米等ノ國ト連合シテ排日云々ト言フニ至ツテハ沙汰ノ限リト云フベシ縱令我國ガ相当連合ノ力アリトスルモ何等帮助ノ因縁ナキ独仏米ノ如キカ之ニ応スルモノニアラズ支那ニ於テハ全ク右様ノ意考タニナキヤ新紙ガ臆測論説ヲ逞フスルニ過キサルモノナレバ此辺ハ貴國当路者ニ於テ誤解ナキ様婦國ノ上可然説明ヲ与ヘラレタシ云々ト述ベ同日徐國務卿招

待ノ晚餐後徐ハ同男ニ対シ支那政府側ニ於テ同公司ノ為ニ
 帮助ス可キ点ハ極力帮助ヲ与フル考ナルヲ以テ同男ニ於テ
 モ同公司ノ事業ノ發展ニ力ヲ添ヘラレンコトヲ望ムトノ趣
 ヲ陳ヘタル由ニ有之候先是廿一日大統領謁見ヲ終ヘタル後
 同男ハ中日興業公司總裁楊士琦ヲ政事堂左右丞ノ事務所ナ
 ル蕉雨軒（勤政殿ノ南手ナル小建物）ニ訪問シ同公司事業
 実行ニ関シ大体ノ談話アリシガ楊ハ尚二十三日中日興業公
 司創立事務所（北城鉄獅子胡同楊士琦侯爵邸李国杰ノ
 住宅）ニ於ケル歓迎会前会見ス可キニ付同公司ノ実行ス可
 キ事業ニシテ同男ニ於テ直チニ施行セラル可シトノ見込ア
 ルモノヲ列記シテ示サレタシト述ベ同男モ之ニ同意シタル
 趣ナルヲ以テ山座公使ハ同男ニ対シ右会見ノ際提出ス可キ
 事業ハ預メ同公使ヘモ打合セアリ度キ旨ヲ申シ入レ置キタ
 ルニ同男ハ電話電燈及礦山経営ノ外四平街洮南線工事引受
 ヲ提出セントノ意考ナル旨同公使ヘ打合セアリタルニ付同
 公使ハ右洮南線工事引受ケノ提議ハ日本ニ於テ既ニ關係ノ
 筋ト打合セ済ノコトナルヤト尋ネタルニ洪沢男ハ然ラズト
 答ヘラレタルニ依リ公使ハ洮南鉄道工事引受ノコトハ同鉄
 道ニ傭聘セラル可キ技師長會計主任等ノ権内ニ在ルコトニ

シト云ヒ楊ハ猶其外ニ支那人側ノ現金ヲ吸収スルタメ一二
 十萬元ノ小資本ニテ興業の性質ヲ有スル貯蓄銀行ヲ先ツ北
 京ニ開設シ事業發展セバ天津上海香港等ノ大商業地ニモ之
 ヲ推拡スルノ案アリ右ハ最初極ク健全ニ營業セバ中日合辦
 ノ事トテ極メテ支那人ノ信用ヲ得小資本乍ラモ其実益ハ多
 少中日公司ノ費用ヲ補助スルニ足ルベシ右ハ孫多森等ニ於
 テ当今支那ノ情態ニ対シテ必要上案出シタルモノトノ事ニ
 対シ同男爵ハ各国銀行又ハ中法実業公司ニ比例シテ右様ノ
 小資本銀行ハ中日実業公司ノ名譽ニモ關係ス可シト述ベタ
 ルニ楊ハ中法実業公司ノ如キ大資本ヲ有スレバ損益共ニ鉅
 額ナルモ最初ヨリ穩健ニ小資本ヲ運轉シ漸々發達ヲ期スル
 ニ於テハ眼前支那人一般ノ信用ヲ博シ他ノ事業ニモ大ニ裨
 益スル所アルベケレバ其点ニ於テ此案ニ同意セラレタシト
 述ベ同男爵ハ然ラバ其事ハ尾崎又ハ森恪ヲシテ孫多森氏等
 ト詳細ニ協議ヲ遂ゲ実行ニ着手スルコトニ異議ナシト答ヘ
 タル由ニ有之候

猶孫外交總長ハ二十四日同男爵ヲ其旅館ニ訪問シ日支兩國
 外交上ノ模様ニ関シテ昌黎事件結了以來益々好感情ヲ深ク
 セリト談ジ繼テ支那財政ニ対スル意見ヲ叩キタルモ羈旅突

テ中日興業公司ニ於テ支那側ト打合セテ運動スルガ如キ問
 題ニアラズ若シ同公司ニ之ヲ引受ケシムレバ夫ハ日本側ニ
 テ与フル恩恵ニ外ナラサル故日本当局ト打合セ済ニアラザ
 ル以上此ノ如キ問題ヲ提出セントナレバ十分余地ヲ存シ置
 ク必要アルコトヲ注意致置候、然ルニ同日同男爵ト楊士琦
 ト対談ノ結果其第一ニ提議シタル電話事業ニ関シ楊ハ交通
 部ト「シーメンズ」会社ノ纏綿セル事情ニ依リ之ヲ中日公司
 ノ手ニ帰セシメントスルハ非常ナル困難アルモ先ツ之ヲ交
 通部ニ説キ其同意ヲ得サレバ徐國務卿ニ迫リ猶其同意ヲ得
 サレバ大統領マテ陳情シテ之ヲ争フノ決心ナルガ果シテ成
 功シ得ヘキヤ只今ノ処確乎タル見込ナシト陳述シ同男爵ハ
 更ニ四平街洮南線鉄道工事引受ケノ如キハ公司ノ事業トシ
 テ最モ適當セルモノナルカ尚正金銀行等ノ關係モアルニ付
 先ツ日本側ニ於テ之ガ運動ヲ試ミルノ必要アリト述ベラレ
 タルニ楊ハ然ラバ電話事業ハ極々内輪ニ見積リ自分ニ於テ
 先ツ三分通りマテハ我手ニ帰ス可キ見込アルニ付前述ノ決
 心ヲ以テ出来得ル限り尽力運動スベケレバ同男爵ニ於テハ
 鉄道工事請負ノ運動ニ尽力セラレタシト答ヘ繼テ電燈礦山
 経営ニ関シテハ何レモ其方法サヘ立ツニ於テハ何等困難ナ

差ノ間ニ此ノ如キ大問題ニ対シテ数言ノ能ク尽ス所ニアラ
 ズト答ヘタルニ然ラハ帰國ノ上支那財政上ニ対スル高見ヲ
 書報セラレタシト依頼シ又曹外交次長モ同シク同男ヲ旅館
 ニ訪ヒ日支親密ノ關係ヨリ説起シ兎角本邦新聞ノ論調ガ袁
 大總統ノ攻撃ニ涉ルコトノ面白カラサル感情ヲ惹起スルヲ
 憂ヘ同男ノ德望ニ頼リテ右等兩國々際ノ妨碍トナルベキ論
 調ヲ改ムル様勸告センコトヲ依頼シタル趣ニ有之候
 之ヲ要スルニ支那当局者ハ同男ノ日本ニ於ケル社会ノ名望
 ヲ利用シテ國際ノ緩和円滑ヲ図ラントノ意旨ニテ今回ノ来
 遊ヲ機トシテ通過各地方ハ申スマテモ無ク来京後ニ於テモ
 出来得ル限りノ款待ヲ尽シ又別信ニテ報告ノ如ク大統領ハ
 特ニ一等嘉禾章ヲ贈リ以テ同男ノ好感情ヲ博セント努メタ
 ルニ外ナラズト存候

同男一行ハ交通部ノ準備セル貴賓車ニ搭乗シ天津ニ二泊、
 山東省曲阜ニ下車泰山及孔陵ヲ訪ヒ夫レヨリ青島ニ出デ大
 連ニ向フ予定ヲ以テ本月二十七日当地出發致候
 右洪沢男滯京中ノ模様御参考迄具報申進候也

（附記）

中日実業会社ノ実行スベキ事業ニ関シ洪沢男

北京滞在中支那側ニ交付シタル覚書写

(六月九日倉知氏ヨリ送付)

覚書

一 中華民國政府ノ計画ニ係ル電話事業ニ関シテ日本國資本家トノ間ニ借款協議円満ニ進行中ナリシ処其後杳トシテ其消息ヲ聞クナキニ至リシガ該事業ハ民國ノ為メ頗ル有利ナル事業ト認ムルヲ以テ速カニ右計画ヲ復活セシメ当合辦公司ニ於テ其借款ヲ引受クルコト、シタシ

一 予テ中日兩國間ニ於テ締結セラレタル滿蒙鐵道敷設契約中四平街ヨリ洮南府ニ至ル鐵道ハ最近ニ於テ愈敷設工事ニ着手セラルベシト聞ク

右鐵道敷設工事及材料器械類等ノ売込引受者ハ契約當事者ニ於テ指定スル管ナルヲ以テ當公司ハ從來引受者タルベク運動中ニテ成功ノ曉ハ當公司ノ為メ尤モ有利ノ事業タルベシ

一 石炭、銅、鉄等ノ鉱山調査ノ為メ當合辦公司ハ民國各方面ニ向ケ技師ヲ派遣スル方針ニテ目下長江沿岸ニ技師ヲ派遣中ナリ右技師ノ調査報告ニシテ有望ナリト認

ムル場合ニハ直ニ鉱山所有者ト調査ニ関スル仮契約ヲ締結シ又官有鉱山ニ対シテハ速カニ出願ノ上試掘ヲナシ以テ他日當合辦公司ガ鉱山經營ノ準備トシタシ

一 當合辦公司ニ電燈部ヲ設ケ民國內ニ於ケル電燈未設ノ都市ニ対シ需要ニ応シ直接又ハ間接ニ電燈業ヲ經營シタシ

四〇九 七月七日 在中国小幡臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛

中日実業会社章程発表ニ対シ外間ノ批評ニ関スル件

附屬書 七月七日中日実業会社章程発表ニ対スル北京

「ガゼット」紙論評切抜

機密第二六六号 (七月十三日接受)

大正三年七月七日

在支那

臨時代理公使 小幡 西 吉(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

過般中日実業会社章程協定相成候趣ヲ以テ御送付有之候処去七月一日該章程ヲ六月二十二日附農商部ノ批准ヲ得タル

趣ト共ニ当地政府公報ニ掲載公告致タル以來著シク世人ノ視聽ヲ惹キ外國人間ニハ一般ニ少ナカラサル注意ヲ喚起候モノト相見エ隨時本官ニ其内容、成立ノ由来、兩國政府トノ關係等ニ付問ヒ合セ来ルモノモ有之特ニ政事堂左丞楊士琦カ總裁職ニ就任シタル趣ノ報道ハ痛ク外人ノ視聽ヲ惹キタルモノラシク独乙側ノ機関ト称セラル、北京ガゼットノ如キハ已ニ一兩回モ本件ニ論及シ批評ヲ加ヘ更ラニ本日ノ紙上ニハ別紙切リ抜ノ通り二欄半ニ亘ル社説ヲ掲ケ主義上ノ問題トシテ官吏力營利会社ノ社員ニ就職スルノ不穩當ナルヲ指摘シ曾テ英國ニ於テ議會ノ物議ヲ惹起セル大藏尚書ノ「マルコニー」会社株券買収事件ヲ例示シテ滔々論議スルトコロ有之候該社説ハ平生独乙側ト接近セル梁士詒一派ノ策士カ外國人ヲ操縦シテ安徽派ニ一矢ヲ向ケ楊士琦排斥ヲ企圖スル魂胆アルモノトモ解セラレサルニ非サレトモ梁士詒關係ノ漢字新聞カ未タ何等公然ノ論議ヲ加ヘス反對ノ態度ニ出デザルニ顧ミレバ寧ロ外國人殊ニ独乙人等カ我ノ進取の実業經營策ヲ猜疑セル結果此等ノ議論ヲ為シ世論ヲ喚起セント試ムルモノト解スルカ若クハ本件ニ藉口シテ同様ノ計画ヲ立ツル素地ト為サント欲スル意向トモ觀察スル

ヲ妥當ノ見解カト存候事ニ有之候數日前小田切カ楊士琦ヲ訪問ノ節本件ニ談及シタル際ニハ楊ハ之等ノ批評ヲ予期シ左迄意ニ介セサルモノ、如ク飽迄總裁ヲ辞セサル趣ノ意向ヲ洩シ居タル由ナルモ將來万一漢字新聞紙上ニ於テ広ク批評ヲ加ヘ若クハ梁士詒一派ノ楊排斥ノ手段ニ供用セラレ甚シキ突撃ヲ試ムル様ノ事ニモ立至候ハ、勢ヒ楊ノ政治上ノ立場ヲ困難ナラシムルノミナラス惹テ中日実業会社ノ事業其者ノ發展經營ニ由々敷關係ヲ及ホスモノト被察候本官ハ未タ楊士琦ト直接本件ニ関シ意見ヲ交換スルノ機ヲ得サルモ近日親シク訪問ノ上其意見ヲ叩キ度胸算ニ有之候ニ付其上ニテ更ニ何分ノ義可申進ト存候ヘ共不取敢本件カ已ニ世論ニ上ルノ徵候アル事情一応及具報候也

(附屬書)

七月七日中日実業会社章程発表ニ対スル北京

「ガゼット」論評切抜

TUESDAY, JULY 7, 1914

A QUESTION OF PRINCIPLE

A few days ago we published a report to the effect that the Senior Assistant Secretary of State had accepted the position of President of the Sino-Japanese

Industrial Development Corporation, which was originally founded by Dr. Sun Yat-sen and Baron Shibusawa last year. There seems no reason to doubt the accuracy of this report, and as the appointment raises important questions of principle in regard to the acceptance of positions of profit by high officials, we may be pardoned for returning to the subject again. So far as is known to the public the objects of the Sino-Japanese Industrial Development Corporation are to acquire railway, industrial and mining concessions in China, which are to be developed under joint Sino-Japanese management with capital raised either in China and Japan, or from some foreign country. The Corporation will probably disclaim any political motives, but politics and commercial concessions can seldom be divorced from each other in Japan, and we are probably correct in assuming that one of the chief aims of the Corporation is to extend the Japanese sphere of influence in China. The question naturally arises whether it is to the interests of the Chinese Government, as the trustee of national interests, that the presidency of such an undertaking should be held by a high official in the administration. We have no animus whatsoever

against Mr. Yang Shih-chi; indeed the fact that no secret is made of his new appointment is all in his favour, as indicating that he accepts it from no corrupt or unworthy motive. Our criticism of the appointment therefore, is based solely upon questions of principle, and upon no personal grounds whatever.

It is well-established principle in most civilized countries, that no paid official must accept or retain any commercial post in which his interests as a private individual may conflict with those of the State. The wisdom of such a principle scarcely needs to be emphasized. An efficient administration is only possible when the integrity and motives of its officials are above suspicion. That cannot be the case when there is any possibility of a clash between the private and official duties of an employee of the State. It is only a year ago since the British public was seething with excitement regarding the so-called Marconi scandal. The two members of the Cabinet, and the ex-Whip of the Liberal party were charged with employing information acquired in the course of their official duties to make remunerative speculations in the shares of American Marconi Company. The Select Committee which

investigated these charges was, unfortunately, divided upon purely party lines, the Liberal majority exonerating the Ministers; the Conservative minority finding that both the Attorney General and the Chancellor of the Exchequer had acted with grave impropriety "in making an advantageous purchase of shares in the Marconi Company of America, upon advice and information not then fully available to the public, given to him (them) by the Managing Director of the English Marconi Company, which was in course of obtaining from the Government a contract of very great importance." The Select Committee of the House of Lords, in a far more judicial and impartial report than either factions in the House of Commons Committee, exonerated the ex-Whip from any dishonourable motives, but expressed a "strong opinion that there should be henceforth an inflexible rule to preclude those who hold any public office from entering upon any speculative transactions in stocks or shares in any circumstances whatsoever, and that this rule should be by them inculcated on their subordinates both by precept and example." Most right-thinking men will agree with the wisdom of this recommendation. Assuming that

it is a reasonable rule, one has only to compare the principle advocated with the acceptance of the post of President of a large commercial undertaking by a high office of State to appreciate the far more serious objections to tolerating such a practice. In the Marconi case not even party influence would have enabled the Ministers concerned to escape censure if it had been proved that they had speculated in the shares of the British Marconi Company. It is easy to imagine what would have happened, therefore, had it been brought to light that the Postmaster-General, or any other member of the Cabinet was Chairman, or even a member of the Board of Directors, of the British Marconi Company. Yet the position accepted by the Senior Assistant Secretary of State is on the face of it, just as much in conflict with his official duties as would have been the acceptance of the Chairmanship of the Marconi Company by the British Postmaster-General while he was actually in office. Whatever might be the motives of an official in accepting such a post, his selection for it by the Company concerned could only be attributed to one motive—a desire to advance its interests with the Government. Mr. Yang Shih-chi

may possess peculiar qualifications for the position of President of the Sino-Japanese Corporation. If that be so, and if he prefers a commercial to an official career, he should resign his official position, and devote his entire energies to furthering the interests of the Corporation. The point we desire to make is that he cannot do justice either to his official post or his office in the Sino-Japanese Corporation by holding them both simultaneously. He is not, of course, the only highly placed official who has been nominated President or Director of a Sino-Foreign undertaking with the object of facilitating the development of its business. In our opinion, if the President really desires to inaugurate an efficient and honest administration, which will faithfully perform its obligations to the nation, it is imperative that "there should be henceforth an inflexible rule to preclude those who hold any public office" from holding any directorships, or being connected in any capacity whatever with any industrial or commercial undertaking which has dealings with the Government. The administration may lose the services of some able officials by the enforcement of this rule, but it will eventually be repaid ten-fold by a general increase of

拝啓

農商部ニ於テ会社設立登記終了ノ件

予テ農商部ニ申請中ノ本会社設立登記ノ件ハ本月二十二日附ヲ以テ許可有之候ニ付キ別紙農商部指令並ニ登記証書写御送付申上候間御覽被成下度尚登記許可証書ノ日付ハ六月十八日、農商部指令ハ六月二十二日ニシテ登記許可証書作成後大總統ノ批准ヲ俟ツテ農商部指令ヲ発シタル為メ四日相違致候カ完全ニ登記手續ヲ終リタル六月二十二日ヲ以テ登記済ノ日ト致候 勿々

註 別紙農商部指令及登記証書ノ漢文写省略シ右指令ノ和訳文ノミ左ニ掲載ス

(別紙)

訳文

農商部指令 第八〇二号

今般楊士琦等ヨリ設立計画中ノ中日実業有限公司ハ既ニ株金日本金一百二十五万円ヲ払込ミ残余株金ハ追テ払込ヲ為スヘキニヨリ設立登記申請方公司定款並ニ登記料ヲ添ヘ願出タリ查スルニ該公司ハ支那法律ニ依リ登記ヲ申請セルモノニシテ其定款モ現行商法ト抵触ス

一〇 中日実業株式会社ニ関スル件 四一一

efficiency and integrity in every department.

四一〇 七月九日 倉知中日実業副總裁ヨリ
松井外務次官宛

農商部ニテ会社設立登記終了ノ旨報告ノ件

附屬書 六月三十日附北京總行ヨリ中日実業株式会社宛
書信

会社設立登記終了ノ件

大正三年七月九日

中日実業株式会社

倉知 鉄 吉(印)

外務省

外務次官 松井慶四郎殿

拝啓陳者農商部ニ於テ会社設立登記終了ノ件ニ関シ別紙写ノ通在北京總行ヨリ報告有之候間右具報申進候 敬具
(附屬書)

大正三年六月三十日

東京

北京 總行

中日実業株式会社

御中

ル所無キヲ認メタルヲ以テ申請ノ通り登記ヲ許可セリ
尚内務部ヲ経テ順天府尹並ニ江蘇巡按使ニ其保護方ヲ命令シ置ケリ茲ニ登記証書(註冊執照)一葉ヲ発給ス
残余株金ノ払込ヲ為シタル時ハ其都度隨時届出テ登記証書ヲ引換フベシ

登記証書添付

中華民國三年六月二十二日

四一一 七月二十五日 在中国小幡臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛

楊士琦中日実業会社總裁辞任ニ関スル件

機密第三〇七号 (七月三十一日接受)

大正三年七月二十五日

在支那

臨時代理公使 小幡 西 吉(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

中日実業会社章程発表ノ結果楊士琦カ政事堂左丞ノ重職ヲ帯ヒナカラ官利会社ノ總裁ヲ兼ヌルニ対シ当地一二外字新聞ニ於テ批評ヲ試ミ之ヲ非難シタルニ付テハ追テ楊ニ於テ總裁辭職ヲ決心スルノ不得已ヘキ時期アルヘキ旨去ル七月

六二五

七日附信機密第二六六号ヲ以テ申進置候処昨日当地同社重役會議ニ出席セル取締役森恪ヨリ本官ニ申報スル処ニヨレハ昨日ノ會議ニ於テ楊ハ兼テ申進置候通り總裁辭職ノ不得已所以ヲ説明シ同人カ政事堂左丞トシテ此職ニ居ルハ偶々其政敵タル江蘇派（張謇ノ率ユル実業派）及ヒ広東派（梁士詒ノ率ユル所謂交通系）ニ對シ相聯合シテ乘スルノ機會ヲ与フルモノニシテ此儘ニ為シ置テハ独り自己ノ政治的立場ヲ危クスルノミナラス延テハ中日実業会社ノ為メ不利益不得策ナルヲ以テ楊ハ此際辭職シテ当面ノ政敵タル梁士詒張謇等ノ銳鋒ヲ避クルコト、シ不取敢其信任スル孫多森ヲ挙テ后任トナシ楊ハ政府部内ニ在テ黒幕トシテ会社ノ為メニ尽力スヘシトノ旨ヲ披露シタル趣ニ有之依テ森恪ハ此決定ヲ齎ラシ東京側役員ノ同意ヲ得ル為メ来ル二十九日前後天津出發上海經由帰朝ノ途ニ上リ候間同人不日着京ノ上ハ東京日本側役員ノ詮議ニ附スヘキ次第ト存候右楊士琦決意ニ對スル本官意見森ヨリ伺出候ニ付前信ヲ以テ予メ卑見開陳致置候通ノ趣旨ニテ楊ノ此決意ハ当然ノ成行ニテ此儘總裁ノ職ニ留任セシムルモ却テ中日実業会社事業發展上種々遣リ悪クキ事情アルヘク寧ロ今日ノ如ク全ク余リ世上

ノ代表者タラシムルコトモ直接間接ニ中日会社ノ不利益ト認メ候ノミナラス從來中日会社ノ幹部役員ハ多ク三井系ノ人物ノミニシテ稍モスレハ当国人ヲシテ中日会社ヲ以テ三井物産会社ノ異名同体タル感想ヲ起サシメ旁時節柄最不人氣ナル三井排斥ノ余響ヲ受ケシムル事ハ中日会社事業發展上不利ノ事ト存候隨テ此際中日会社ヲシテ可成三井の色彩ヲ帯ヒサル様相努候事最策ノ得タルモノト存候ヘ共差當リ当方面ニ其縦横ノ才氣ヲ發揮シテ奮闘シ中日実業ノ頭緒ヲ開拓スルニ足ル人物トシテハ先ツ以テ森程ノモノヲ得ル事至難ナルヘシトセハ本官ノ意見トシテハ

一、当分森ヲシテ此儘ニ留任セシメ各方面ニ對シ能ク意思ヲ疏通セシメ從來ノ誤解ヲ氷釈スルニ努力セシムル事
森ハ人物極メテ機敏ニシテ優秀ナル事務の才能ヲ有シ頗ル奮闘的資質ヲ有スルヲ以テ或ル時日ノ間ニハ必ス右ノ目的ヲ達スヘシト信候特ニ楊士琦孫多森曹汝霖ナトハ左迄本人ニ對シ惡感ヲ有スル様ノ事無之ト認メ候
二、森ヲシテ此際三井ニ手ヲ切ラシメ中日重役トシテ北京ニ常住シ専念会社ノ為メニ活動セシムル事

此コトハ独り中日会社ヲ三井系ノ分身タルカ如キ誤解

物議ノ種トナリ居ラサル時期ニ解職ヲナシ其代ハリ楊ノ最モ信任スル人物ヲ挙ケ后任トシ以テ楊ヲシテ裏面ニ於テ縦横ニ画策会社ノ為メニ有力ナル后援タラシムルコト此場合最モ策ノ得タルモノナル旨本官意見トシテ森ニ申聞置候森帰京ノ上ハ右本官ノ意見モ自然事情説明ノ為メ援用スル事可有之ト存候間此段特ニ達貴聞置候

尚ホ楊士琦ハ近ク交通総長ニ転任ノ事ニ略ホ内定ノ趣ナレハ何レニシテモ同人ノ中日總裁辭任ハ事情不得已次第ト被認候尚ホ先般帰国ノ有賀法学博士ヨリ或ハ当地官辺ニ於ケル三井物産会社並ニ前記森恪等ノ氣受頗ル面白カラサル趣内報致候事ト存候処右ハ有賀博士帰国前本官ニモ内話有之タルヲ以テ本官ニ於テモ爾來注意シテ官辺ノ意向相探リ居ル次第ニ有之候今日迄本官ノ取調ヘタル処ニヨレハ三井物産会社ノ北方ニ於ケル氣受甚タ宜シカラサルハ勿論南方ニ於テモ其人氣頗ル面白カラサルハ（中央袁派ニ對スル遠慮モ之アラン）略ボ事実ニ相違ナキ様存セラレ同社カ其對支營業方針ニ大ナル變更ト周到ナル緩和策ヲ講スルニ非スンハ当分少ナクトモ官辺關係ノ營業ニハ殆ト手足ヲ出スノ余地可無乎ニ被察候之ト同時ニ三井系ノ人物ヲ中日実業会社

ヲ去ラシムルニ必要ナルノミナラス同社ノ如キ将来多大ナル事業經營ノ使命ヲ有スル会社カ專任ノ代表者（日本側）ヲ北京ニ定住セシメサルノ不利不便ナルハ多言ヲ用キサルモ業ニ已ニ御承知ノ事ト存候

三、中日会社ノ活動資金ヲ潤沢ナラシムル事

同会社ノ通常經費ハ目下如何ナル費目ヨリ支弁致居候カハ本官ノ承知セサル処ニ有之候ヘ共外国資本家カ有利ナル利権ヲ獲得スル経路ハ多ク潤沢ナル運動費ト關係者ノ努力トノ二点ニ歸スヘキモノト思考被致候我中日会社カ愈真面目ニ其事業ヲ進行セント欲セハ漫ニ支那人ノ厚意ニ訴フル様ノ空想的行動ヲ避ケ直ニ支那關係者ノ急所ニ交渉シ活動スルコトノ必要ナルハ本官ノ論議ヲ俟タス疾ク御詳悉ノ事ト存候就テハ中日会社ノ現定款等ノ範圍内ニ於テ果シテ此等ノ事ヲ実行シ得ヘキ余地アルヤ否ヤハ承知不致候ヘ共少クモ現在ノ資本金ヲ挙テ之等ノ活動費ニ流用スル様ノ決心無之テハ目覺シキ事業モ手ニ入ル間敷ト愚考致候元來楊士琦カ今回總裁辭職ノ上ハ裏面ニ於テ会社ノ為メ尽力ヲ為シ后援タルヘキヲ望言シタル趣ナルモ楊ノ此言ニ對シテハ

果シテ如何ナル程度迄信用ヲ措キ可然乎要スルニ楊ニ
モ支那人タルノ通有性ハ勿論可有之事ニテ利害ノ打算
ニハ極メテ鋭敏ナルヘキ筈ナレハ楊ノ口約セル所謂尽
力后援ナルモノモ我方ノ体度如何ニヨリテハ彼又如何
様ノ態度ニ出ツルモ難測ト被存候ニ付楊辭職後モ矢張
リ裏面ニ於ケル尽力ヲ敢テシ得ル丈ノ措置ヲ施シ置ク
事必要ト存候右様ノ次第ハ森帰朝ノ上詳細東京幹部へ
提議スヘキ事ト存候処森トハ大体意見ノ交換ヲ為シタ
ルニ止マリ敢テ詳細ニ亘リ打合ハセタル次第ニハ無之
ニ付森所見ノ詳細ハ承知不致候ヘ共同人ノ意見ハ大体
ニ於テ本官ノ見ル処ト一致スル次第ト御承知相成度候
右本信后段所陳ノ意見ハ楊士琦辭職ノ件ト何等関涉無之候
ヘ共中日会社ニ関スル鄙見ノ一部トシテ不取敢附言致タル
次第ニ付一応ノ御査閱相煩度候也

四一二 八月十日 加藤外務大臣ヨリ
在中国小幡臨時代理公使宛(電報)

余干鉞山ト中日及順濟両会社ニ関スル件

第三三六号

本大臣宛有吉来信八月二日付機密第六四号ニ関シ

辺ノ事情ヲ考慮シ大局ヲ誤ルカ如キコトナキ様致度候ニ付
尾崎貴地到着ノ上ハ事情篤ト御聞訊相成同人ニ於テ何等右
ノ趣旨ニ適ハサルカ如キ申出ヲナシタルトキハ前記ノ意味
合ヲ以テ戒飭ヲ加ヘラルル様致度此段申進候也

四一四 八月二十八日 倉知中日実業副總裁ヨリ
小村政務局第一課長宛

尾崎中日実業専務渡華ニ付心得ベキ事項指示

方依頼ノ件

附屬書 八月十一日附北京總行ヨリ中日実業株式会社宛

書信

我方ノ借款条件指示方請訓ノ件

拝啓

時節柄懸御繁忙ノ義ト奉存候扱過日北京支店ヨリ(森恪不
在中ノコトナリ)別紙ノ通来信有之候処当時貴省ノ極メテ
御多忙ナル折柄ニ御座候間其大要ヲ一言次官及政務局長ニ
御話申上候ノミニテ態ト御遠慮致居候漸次多少ノ御閑モ御
出来申候乎ト存シ老兄迄右来信ヲ入御覧候御便宜ヲ以テ局
長ニ御提出被下候ハ、幸甚ニ存候尚右ニ関シ自然公使館側
ヨリ何分ノ御来示有之候節ハ御内示奉願上候尾崎北京行ノ

一〇 中日実業株式会社ニ関スル件 四一四

中日側ノ遣リ口ハ大倉側ノ仕事ヲ妨害スルニ均シク甚不都
合ノ次第ニ付可然内情御確メノ上四月二十七日附機密第一
七六号貴信ノ次第ヲモ参酌セラレ必要ノ場合ニハ大倉側ノ
立場ヲ支持シ適宜措置相成様致度シ

註 本邦企業家ノ暗闘ニ関スル件ナリ省略ス

四一三 八月二十四日 加藤外務大臣ヨリ
在中国日置公使宛

余干鉞山ニ関スル中日実業会社ノ遣口ニ鑑ミ

尾崎専務ニ注意方訓令ノ件

政機密送第二七六号

中日実業会社取締役尾崎敬義渡支ノ件

今般中日実業会社取締役尾崎敬義社用ニテ渡支スルコトニ
相成本月廿五日当地出發貴地ニ向フ趣ニ有之候処往電第三
三六号ヲ以テ申進置キタル次第第モ有之候通り余干問題等ニ
関スル中日実業会社ノ遣口ハ兎角大倉組ノ事業ニ妨害ヲ加
ヘントスルノ嫌アルハ甚タ遺憾ニ堪ヘサル次第第二有之我對
支企業家殊ニ大倉組、中日実業会社ノ如キ有力ナル輩ガ互
ニ相陥擠スルガ如キコト有之ニ於テハ結局我對支企業ノ發
展ハ到底望ミ難キ次第第二有之候間中日側ニ於テモ篤ト此ノ

義都合有之少々延引致居候処一兩日中ニハ出発可致候右ニ
付小生ヨリ同人心得方等訓示スベキ義有之候ハ、電話ニテ
御呼出被下度何時ニテモ参上可仕候 早々不一

八月二十八日

倉知生

小村学兄

侍史

(附屬書)

大正三年八月十一日附東京本社宛北京来信

拝啓今回歐洲ノ戦乱起リ当分五国借款成立ノ見込無ク刻下
支那財政ノ窮乏ヲ救フ為メニハ当局者ニ於テハ關稅收入ヲ
暫時流用スルコトヲ各国ヲシテ承認セシムルノ希望ヲ有シ
居レドモ目下支那ト各国トノ貿易ハ日米兩國ヲ除ク外殆ン
ド杜絶ノ有様ニテ從テ關稅ノ收入減少シ關稅流用ノ一途モ
實際財政補救上何等ノ効力無ク現ニ米國モ支那ニ對シテハ
借款ニ応シ難キ旨ヲ通告シタル趣ニテ孫多森氏ハ楊士琦氏
トモ相談ノ上本公司成立以來未タ何等ノ事業ヲモ仕出来サ
ズ甚タ心苦シク思ヒ居ル折柄本公司ノ手ヲ經テ支那政府ニ
對シ日本ヨリ幾分ノ借款成立ニ尽力シ之ニ附帶シテ何等カ

六二九

ノ利権ヲ得ルコトハ甚タ面白カラズヤトノ内談アリ小生ハ目下日本民間ニ於テ一二千万円ヲ調達スルコトハ決シテ難事ニアラサルコトヲ説明シ若シ支那政府ニ於テ借款ノ希望アレハ倉知氏ノ来京ヲ請ヒ相談ヲ進ムルコトニシテハ如何ト提議致シ尚小幡代理公使ニモ此旨相談致シ候処素ヨリ賛成ニテ可成公司関係者ヨリ倉知氏ノ来京ヲ促ス様手配セヨトノコトニテ其間多少奔走ヲ試ミ候処最後ニ楊士琦氏ノ意見ニテハ吾々同人ニ於テハ此際日本ヨリ借款スルコトハ甚タ希望スル所ナレトモ吾々ヨリ財政当局者ニ提議シ日本ハ如何ナル条件ニテ借款ニ応諾スルモノナルヤトノ反問ヲ受ケタル場合ニハ之ニ対スル意見ノ申出様無ク兎ニ角上記ノ意見ヲ本社ニ御通知ノ上借款引受額(支那政府ハ一千万乃至二千万)利子、折扣、償還方法、担保品(事實目下担保品ナシ有望ナル礦山採掘権其他鉄道敷設権等ノ利権ヲ得ルコト比較的容易ナルベシト存候)等日本側ヨリ先ツ指示サレタク然ラハ楊士琦氏ヲ經テ財政当局者ニ相談ヲ試ミル可シトノコトニ有之候

小幡代理公使ハ此際借款ヲ利用シ鉄道礦山等ノ利権ヲ獲得スルコトハ甚タ容易ニシテ逸スヘカラザル好機ナリ過般奉

四一六 九月三日 小池政務局長ヨリ
倉知中日実業副總裁宛

余干鉞山ハ中国側ニ於テ中日及順濟間ニ二分シテ許可ノ意向ナル件

機密扱

拝啓陳者先刻御話致置候書類一通加封及御送附候間御査閱相成度尚中日順濟両者間ニ余干鉞山ヲ二分シテ許可云々ノ件ハ「余干鉞山ノ件ハ中日側ヨリ出願シタルモ却下セラレタル為更メテ楊士琦ノ名義ヲ以テ出願セシ処支那政府ニ於テハ江西政府ノ分ヲ除キ中日順濟両者間ニ二分シテ許可セントスル意向ナル旨確聞シタリ」トノ報告ニ基キ御内話致シタル次第ニ有之候又他ノ方面ヨリ森恪氏モ楽平炭鉞採掘権等ノ獲得ニ関シ種々裏面ノ運動ニ從事シ居ルヤノ情報ニモ接シ居リ候ニ付之亦御参考迄御承知ニ入レ置度右要事ノミ一併得貴意候 敬具

四一七 九月四日 小池政務局長ヨリ
倉知中日実業副總裁宛

中日実業ノ鉞山採掘出願ニ対シ山東都督許可

一〇 中日実業株式会社ニ関スル件 四一六 四一七 四一八

天省ニテ借款ノ相談アリ(金額五百万円)タルカ日本ノ条件敵ニ過ギ終ニ不成立ニ帰シタルガ其五百万円ハ今回申込ノ分ニ振当テルコトヲ得ベク此際何トカシテ日本ヨリ借款ヲ成立セシメ度ク兎ニ角自分ニ於テモ考慮シ置ク可ケレバ右ノ旨ヲ不取敢東京ニ通シ置ケトノコトニ有之候
先ハ右申上度如此ニ御座候 勿々

四一五 八月二十九日 加藤外務大臣ヨリ
在中国日置公使宛(電報)

中日及順濟両会社ノ余干鉞山採掘出願ニ関スル措置方ニ付訓令ノ件

第三九一号

余干鉞山ニ関スル中日ノ出願却下セラレタル為更メテ楊士琦ノ名ニテ出願シタルニ支那政府ハ江西政府ノ分ヲ除キ中日ト順濟トニ二分シテ許可セントシ順濟側ハ先願人トシテ已ニ内諾ヲ得タルモノ故不承知ヲ唱ヘ居レルモ楊士琦トノ關係上成行懸念ニ堪ヘザル旨大倉上海支店ヨリ本店ニ來電アリ就テハ往電第三三六号及八月廿四日附政機密送第二七六号ノ趣旨御含ノ上可然順濟側ニ援助ヲ与ヘラレ度シ

註 前掲二二九文書参照

ノ件

(親展)

拝啓陳者九月三日曹汝霖ハ小幡書記官ニ対シ貴社ノ事業ニ関シテ愈々山東都督ハ近日予テ貴社ヨリ出願ニ係ル二三鉞山ニ対シ許可ヲ与フルコトニ決定セル旨内話シタル趣日置公使ヨリ來電ニ接シ候間右御含置相成度此段不取得貴意置候 勿々

四一八 九月十九日 在中国日置公使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

中日及順濟両会社ノ余干鉞山採掘出願ニ関シ事情説明及請訓ノ件

第六九四号

余干問題ニ付大倉組支持方一再御訓令ノ次第モ有之十分尽力ヲ試ミタルモ何分楊士琦ニ於テ中日側ヲ助ケ張謇ニ圧迫ヲ加フルト共ニ他面密ニ江西官民ヲシテ順濟ニ対シ反対ノ氣勢ヲ擧ケシメタル結果(在漢口總領事報告参照)農商部ノ態度漸ク軟化シ既ニ最近船津ヲシテ次長ニ就キ底意ヲ探ラシメタルニ同部ニテハ全鉞区ヲ三分シ江西官憲順濟及中

日ノ三名ニ各二鉱区宛ヲ許可スルコトトシテ解決ヲ計ル心算ナル旨洩ラシタル趣ナリ本件ハ今ヤ大倉組対中日問題タルニ止マラス張謇対楊士琦問題ト相成リ居ルヲ以テ仮令当方ヨリ順済一手許可方ヲ迫ルモ實ニ其目的ヲ達スルコト困難ナルノミナラス徒ニ楊士琦一派ニ反感ヲ与ヘ場合ニ依リテハ大倉中日共仆レトナルカ如キコトナシトモ計ラレサルニ付此際兎モ角農商部案通り夫々一日モ速ニ許可ヲ得其上ニテ中日順済間ニ妥協ヲ遂クル方得策ナルヘシト思料ス何レノ途我方ニ於テ衰ノ股肱トシテ羽振能キ楊士琦ヲ度外視シ大倉ノ肩ヲ持ツカ如キ態度ヲ示スコトハ他ノ關係ニモ面白カラサル影響ヲ及ボス虞アルニ付其辺御含ノ上篤ト御詮議ノ上何分ノ義御電訓ヲ請フ

四一九 九月二十日 加藤外務大臣ヨリ
在中国日置公使宛(電報)

余干鉱山問題ニ関シ傍觀方訓令ノ件

第四三六号

貴電第六九四号ニ関シ本件ハ目下中日大倉間ニ直接交渉中ナルニ付暫ク成行ヲ傍觀相成様致度シ

何分よろしく御示教賜り度奉懇願候 敬具

註 左掲附屬書ノ朝日商會事務報告ハ左掲附記ノ阿部政務局長

要請ニ対スル回答ト看做サルベキモノナリ

(附屬書)

大正二年十二月在上海旭公司提出ノ朝日商會

事務報告

目次

第一、総説

第二、事務所

第三、事務營業ノ方針

甲、内部的關係

乙、外部的關係

第四、取扱事務概要

(一)、盛宣懷土地ノ件

(二)、大運河附近一帯産業調査

(三)、南京附近農場調査附浙江省鎮海附近新田設置調査

(四)、礦山調査

一、山東省利国駅、直隸省山海関附近礦山調査

二、支那本部礦山踏査

一〇 中日実業株式会社ニ関スル件 (附) 四二〇

附 朝日商會

四二〇 一月二十六日 高木陸郎ヨリ
小池政務局長宛

朝日商會ノ事務報告送附ノ件

附屬書 大正二年十二月在上海旭公司提出ノ朝日商會事務報告

務報告

附記 大正二年六月十七日附阿部政務局長兼高木陸郎宛書信

朝日商會ニ関シ詳細報告方要請ノ件

大正三年一月二十六日

高木陸郎

小池政務局長殿

拝啓

時下向寒之砌益々御清祥の段奉賀候

一昨年本商會(支那にては旭公司)創設以来公私共ニ種々御庇護を蒙り候段忝く奉謝候就ては折を見て本商會業務の一斑御耳聴に達し置き度存じ居り候処今回上海支店より昨年末迄の事務報告送附致し参り候に付茲許封中御内覧に供し申候間御多用中恐縮ながら御覽置き被成下度今後とも

甲、湖南班

乙、湖北、湖南、浙江班

丙、河南、湖北、安徽班

丁、安徽方面

三、其他ノ礦山及蒙古金礦

(四)、蒙古方面ノ調査

(六)、滿洲

(七)、杭州通益公紡績廠借款ノ件

(八)、武昌四工廠借款

(九)、日本円銀流布ノ件

一、江蘇省清江浦ニ拾万弗借款

二、安徽省錦衛州借款

三、円銀兌換取扱ノ件

(十)、電灯会社借款

一、上海内地電灯公司借款

二、常熟電灯公司借款

(十一)、中国興業公司ノ設立

(十二)、湖南省老千万円借款

(十三)、電話借款